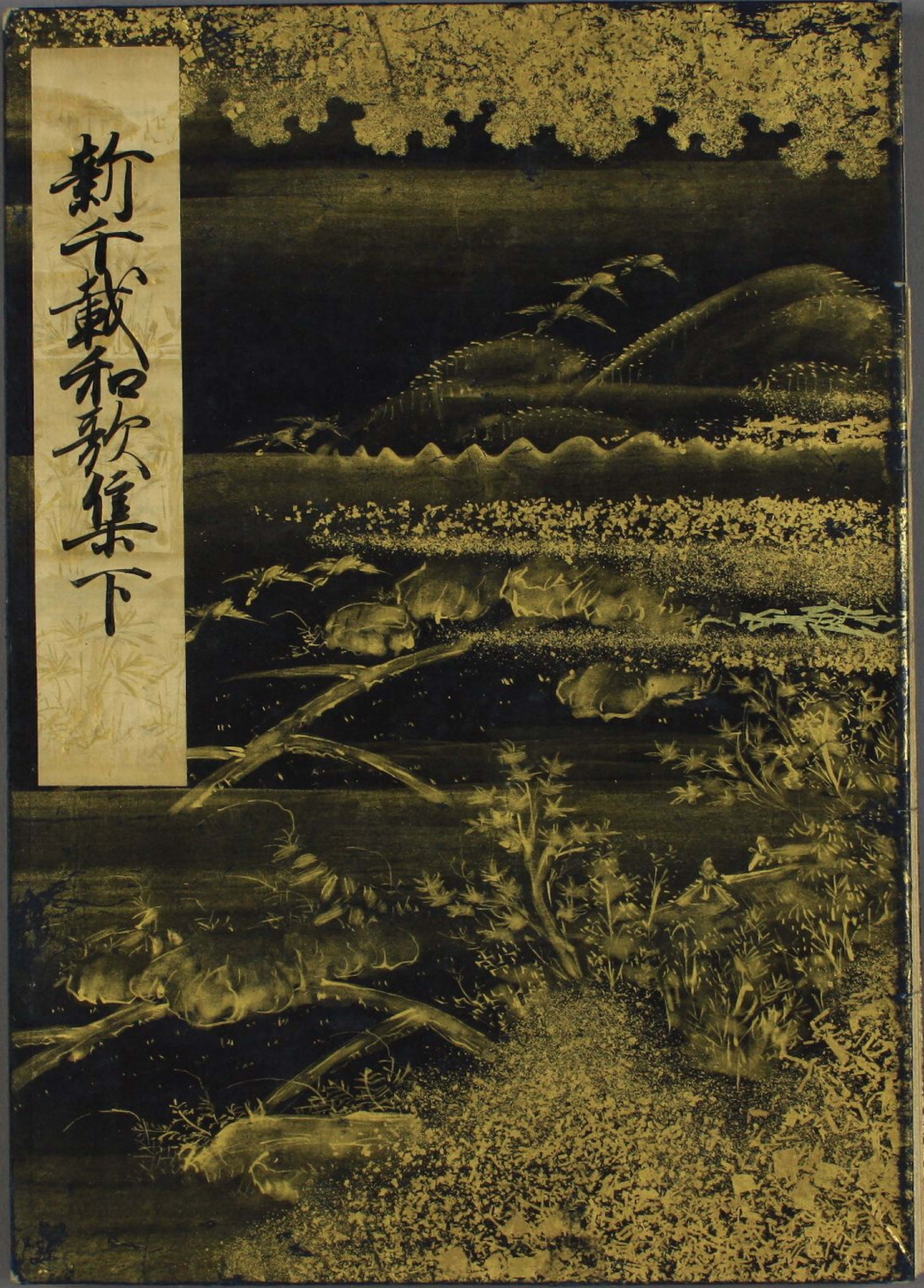
新千載和歌集 下



九曜文庫

新千載和歌集巻第十六

雑哥上

題しらす　大納言師頼

難波かたゝまつそ鳴なるたまやうのたゝぬ浦まてもゆきけん

宝治百首哥たてまつりける時浦霧　山階入道前左大臣

白妙に霧の衣をきてみれはたゝの浦波そよそにみゆる

萬葉集のことはとてよませ給ひける　伏見院御製

昨日けふ中にこそいにしへのことのはゆくとふとと

うかりけるわかれのちきりいまはたゝ浦よりなれてあかぬなみかな

亭子院かくれにおはしましけるにしのひて日よふそらにいてゝとふとて題よみてたてまつりける　坂上是則

山ふかみおりゐる雲と海原のそらをへたてゝやみえつらん

題しらす　よみ人しらす

神さひて岩ねにしこるさみのふかきはけ山をとれかるも

正治二年百首哥たてまつりけるとき　前大納言忠良

見よ人はもともいましめぬまたはれて絶あひ雲居

題しらす　　前中納言有忠

雲はみな払ひとはみえて立のほる煙そたなひくふしの山

左兵衛督基氏

清見かたむかしはなかりまし山ありとも見えし雲そたなひく

堀河院御時百首哥たてまつりけるに

京極前関白家肥後

松山のいくよの松のたまそや若緑もときはなるらん

貞和二年百首哥奉りし時

権大納言忠季

おきつの浜松かえに吹風はよせくる波の音もまかれと

高祖父秀能卿若江のつりよりなかさつけ侍

りけるよつきて箱越のことありそれは経若

祐よ偽して待ちつゝふみのやうに

書そへける　　藤原秀経

立かへり思ふ（松し）ひあまし経若なくしるる末まさふ浪の末の浪

百首哥奉りし時　浦松

前中納言有光

清見かた関より外もいかなれは松よりかゝるの空なかれ

名所松とよみけるを

弾正尹邦省親王

いく代にかつもりぬる年ともおほえぬ濱松かえまたらん

濱島一葉といふことをよめる

皇太后宮大夫俊成

とゝとしれはしらすそ濱のおもみのしつくそらしきかな

亭子院石山にみゆきして後を給へりける日返

西のつきさらにてみえ海にゆきまうけつゝ

まつりありきとそらにはあれなんとせし藷

みれはよめる　大伴黒主

なら波ひまなく岸をはらふやなきさ清くはそれとみなや

文保百首うためしける時

津守國冬

ゆふそみへりかれ蓋の海おもてに波まなし入相の鐘

正安元年六月廿八日内裏三百首哥合に

海邊眺望といふことを

前参議雅宣

入日さしほのかにせきとくれわたる雲やよそなる雲のひまより

建武二年内裏にて人〻に題をさくりて

歌よませられける時

右権僧正雲雅

玉鉾やいく波あへしおかふこの河上とほくかしらふかし

山の家みりきさになとしかくり梅の屏風に
承りてうた奉るとて
ねをあえてあふきさうかけ梅の池のふかきさとはなの絶
建武二年千首歌に立春歌奉るとてよみ
せ給ひけり
後醍醐院御製
よろつ世のはしめのはしめ初子の日の松ときかはや
元弘三年立后月次屏風に朔旦乃心を
おさまれる代のはしめも大君のめくみそみえし今朝のうたまつりける時神楽のこゝろを
後光明照院前関白左大臣
元亨四年正月後宇多院に十首歌奉りて
まつりける時神楽のうたを
民部卿為藤
のとかなる君か代にあひて天の代によろつよすへて歌をまうす
題しらす
前大納言實教
山のはとかすめはいつと月ひくらしてうたとも思はせん
貞和百首歌めされし時
入道二品親王尊圓
今もなほ君かよに松の緑世よはりしかさ神代とそみる
子日にあまつりゐめりける日祇園伯耆仲仕に
やしろにひきうつしけるにたりいつはりしるし

待賢門院堀河

いさゝふ子日の松のつまてそ老木も千世とよはふらん

返し　神祇伯顕仲

わかともゝ老木の松にくらへてそいくら千世をかそへん度

上陽人のこゝろをよみ侍ける

鴨邦祐

さくともいとひても見る宮中に春の鶯の声は忍

題しらす

前大納言為家

いと世あてなるを物きゝは春としへし老その枯木もひさしき紀家

東光百年ゝめされけり次なり

後宇多院御製

時しあれは岩より出る鶯も世をたゝしくつきへとや

寛治二年後嵯峨院に百首哥奉りけるとき春草を

花山院前内大臣

冬枯の草葉はみなしなえしに春の光のやふしまきは

題しらす

清原實性

春雪はふるのゝ雪は消ぬれともかなやきぬつまし

後堀河院民部卿典侍

山の端の在明の月とひとつにて霞にまよふ鶴の一声

前大僧正慈順

園ちかき軒の梅か花ゆかしさにとけて匂ふ春風

藤原家秀

雅望かさねてしるし匂ひあはしさまに梅か下せ
享元百年のためにてまつりける時柳

前中納言雅孝

柿本の老木の柳代々をへてきみにつかふやとそ聞ゆる

源重之女

春雨にあをきころもやとまれひさしき世とこむかしの袖そ露けき
延宝六年三月十八日百年の御忌にあたり
けるに前大納言為世すすめ侍りて奉納

詠しそへける中に 前大納言為氏

年をふる柿乃柳木このもとになれて春をしるや
通し

照念院入道関白太政大臣

乃まさりしなのさとそけふの春雨にぬれまされ君に住て
春日社にたてまつりける百首の中に

為道朝臣

形そふよわかさるひの春雨にふりは代々に知る恵みそ

文保百首たてまつりける時

民部卿為藤

ひかりそふ聖の御代にあふことも友とさそふ春雨

題しらず　亀山院御製

やまとしま松のことはにたてりきえはいつゝの叡覧

貞和百首歌めされし時　前中納言雅孝

我袖に光の洞のうつらずはかはるむかしの月をみましや

平宗宣朝臣すゝめ侍ける住吉社三十首歌中に　法印定寂

今は身にくもりそめぬるかゞみさへ老の涙にくもるよの月

おなしく月歌を　中務卿宗尊親王

たえてみし身はおもひいるかゞみにうつす月も袖にやどるらん

題しらず　頓阿法師

めくりあふ春や昔のかげの身と月影ふかし雲深みこそ

祝部成国

老ぬれは月やかゝみとなりにけむすゝしくもかゝる影をみるかな

後光明照院入道前関白左大臣

思出る月やわすれぬとなかむれは涙そかゝるむかしの袖

後宇多院よめりける日吉社歌合に　兵部卿隆朝

かなしむ秋の月をはいとひしと思ふそて雲さへかゝる身のかなしけれ

千五百番歌合に　後鳥羽院御製

移ろふ峯の霞にかくれたる梢つゝさやかなる春の夜の月

山家翫花といふことを

中宮大夫公宗

はなしさは春もかはらぬ山里に人めをそふる花のゆかしさ
やまひとさりに待ちける春やまひとひ幾日ならん
まて庭の花かさそく咲待かねたるにしめる

従三位藤子

おりしもあれ春もこ人ゆかしし小まつにはなとさくらもはやき

花十首歌よみ侍けるなかに

藤原仲實朝臣

花はたゝ花にしもこゝろをまつは命のうちそあやうき
のそむとも春はかはさりけるをやよひのくれ
めつらしまて庭の花はさ待ちさりけるは

藤原宗秀

月そらく春めく空のそなためもさゝ時をさしぬ霞
花しらす

祥子内親王

山ふかみ花みてこゝろ小鳥もやうき世のうちに梅あれやと

平維貞朝臣

鳥の音はいつもの夜をしてもそこつゝみのしらぬ

藤原宗繼

花のころ猶分入は吉野山又かさなれる峯のしら雲

権律師則祐

あのりくと見わたされて遠山桜もともにみえぬ峯の白雲

弾正尹邦省親王家五十首歌に花

祝部行親

み室山も咲ぬらし榊葉の花によそへて枝にかゝる白雲

建武二年内裏千首歌に花を

てなれけむ時に植置しいつとも

慈好法師

久堅の雲の上まて出る日の光にかゝる山さくらかな

題しらず

永福門院内侍

さらにいふ今の世の花のさかり

前僧正道勝

世のうさもさこそはあらめ山桜ちるをなけきや花を惜まん

前大納言為世家にて花をよみ侍りて千

首歌よみ侍ける時山家花

法印定為

風さそふ花のかきりは山桜ちるをうき時そ花にあらむ

百首歌よませ給ける中に桜

土御門院御製

いそまぬものはちらまれ歎のりしに春はつねまと
春乃ひ中に　前参議忠定

あらまして後光厳九重にうつされ庭乃花の下に
文和四年春比之ハ仍の小祝部成国家皇居
なり侍りしをとりわき世中しつまりて還
幸の時子の障子よ御製をあそはし一つを
らまして給はれし前関白のもとへ給ける
祝部成国
かりそめの御幸なりしもみやゐにも雲ゐの名をや残さん
跡しらす
権僧正静伴

桜花老木のもとゝみるにもわかなくさそちれ春もさかれ
後宇多院宰相典侍
年をふる我涙まてそひぬらんもとも老木やかくらん
道因法師
植て見し老木の花はよとゝいへん一小きん子は雅のまほにと
花のちるもとみてくよあり
三条入道前太政大臣
あすみてもよしやさゝし桜も年の老のくれなゐき月は
前大僧正良信能とさくりて歌合し
給けるに
前大僧正實聰

春とれ花よんを惜しさてまては老ぬる身を歎かれ
ぬしらす　前深栄
思ふにおもてやこそ忘れかしは命にかまさせてそん
二品法親王覚助
ともえぬるよかひを花よ見へてもしらすやかて春の嵐
夢窓国師
ちりはてても花はなきさの色をよ我為よ春の山かせ
中務大輔にて賀茂臨時の祭の舞人
待とめて待ちる時の花の色と人のりしに
つかはすとて
従三位為継

いまはもの(ゝ)やかまらまし　ちらぬ桜のいろをみせは
家のなりけるなりとて　等持院贈左大臣月
花よ思ひく力侍りけるを聞まてそのもふ法
遣つかはしける　前大納言為世
散は花も人とも雅ともせねは我その花としたひて侍る
返し
等持院贈左大臣
ちるをしたひて同し座は我れは我その花をやならん
ぬしらす
法印房観
うらみきるもふかくなるをそてちるはなこひし風や吹らん
民部卿為藤やよひの比東山の房舎よ見まかり

て花見ゆるそのちる山さくら梢はうつろひぬめりなれ
のもは春風そふくとやつらして偲ぶらむ
よ

妙阿法師

山里はとく進庭も紅えてちりしく花よ春風吹
影しらす

丹波長有郎下

ちる花はそれとわかしのはるふかみ思へはつらき山桜かれ

菅原保継

はるひめる雲なきしのをちかたにしはしてや風よちるらん

藤原泰宗

あかしの種よなかし雲さへそくさと限と花やちるらん

大江頼重

芳野山ちりぬる花の形見さへのこさぬ雲に春風吹

源宗氏

ちる花のなこりは雲も残るなる春乃別そなくてなかなか

前左兵衛督為成

さえそれもの雪ふむ駒人そに雲の外の雲乃かよひ姿

元弘三年立后屏風に苗代

権中納言雅継

あら小田にはやすなへもゆくなる民乃心にかゝるすゑ
おもしんと

参議敦有

せき入ていくらもぬるゝ山田のなはしろ水はみなきりけり

弘長元年百首哥たてまつりける時三月尽

前大納言為家

月はなを心にならひせよとも行春の余波はなを惜三月の

花しらす

平高宗

数ならぬみ山かくれのおそ桜さくは時しられぬとも

藤原泰宗

つれなくて残しもやまの時鳥しらさるの初音なくとも

雅宗河後郎下

時鳥まつともかさり我宿に思ひもまさる初音なりけり

三善遠衡朝臣

待かねんと忘て郭公人のまたぬや初音なるらん

藤原行朝

行てこそいつくの山ちに帰来にまさきねとつくる郭公

法眼能善 法印能信男

待わひし時と山路の一声を又まちえてそ入ぬところすれ

前大納言公蔭

うれ世には我をも忍ね時鳥いてまし山乃おくもしらまし

従二位行家

時鳥山路に行はしきりにてや出てこそ雲井に高くなくらん

新日吉社にて歌合し侍りける時山居夏
興　　祝部行親
さみのこゑを高根て時鳥わかゆく山の雲になくなり
時鳥をよめる　　前大僧正澄舜
我とくや山ふきを問へさらに鳴てるもあるかなしきれは
柏秀房
郭公こゑはまてこそなと老のね覚をあかしかねつ
弾正尹為尊のみこうせ給てのち橘を
和泉式部かもとにつかはして侍けれはかへし
かほるかによそふるよりは時鳥きかはやおなし声やしたると
さらむとはありけれはおもふに
太宰帥敦道親王
おなしえに鳴つゝをりし郭公声はかはらぬ物としらすや
五月五日くす玉をつかはすとて
前大納言為定
代々をへてたのむそなたのあやめ草文も今の袖にかけゝる
返し　　源清氏朝臣
さふいおなしみきはのあやめ草をえてもたのみにかくる袖
題しらす　　源頼遠
誰にかとまつ夏の山の時鳥心の行ゑしる人そなき

家に郭公十首哥よみ侍ける中に

法性寺入道前関白太政大臣

明ぬとて山ほとゝきすいつるまにさ月のやみにまよはん
思ふ知

従三位行能

郭公なくねはしるへにを山のこのまの月そほのにさやけき

法皇御製

夏草のしけるとよそのすゑいつる山ちは昔も露けかりけり

宣陽門院

九重の昔かへりもしのふれは匂ふそ夕の袖のあやめも

後頼朝臣

猶まもれ門のおもしかならて一すちならす坊そへの道さ

惟宗光通大内記になされて侍ける比権
大納言為家卿もとへ哥よみて侍けり

惟宗光吉朝臣

君か代にこのやまとうたゆくや家の言葉はひろひあつめん

家哥中に

前大納言實教

したもゆと光みえぬる月のかけやさしく昔おもふなみたなりけり

権少僧都行照

いとひても猶つきせぬ世のうき蛛の身をなかめつゝねをそなるゝ

千恵法師

荻風よ雲のはたてのちりやさそはなん月みるよひの宮このそら

元亨三年七月亀山殿にて人々題を分て
百首歌つかうまつりける時初秋風

前参議経季

なをさりの荻の葉よりも吹風の涼しさにこそ秋はしらるれ

題しらず

後西園寺入道前太政大臣

袖のうへにおきしく露のかはらすは昔にかはる秋やなからん

嘉元百首歌奉りける時初秋

前大納言経継

いかにしておきやそふらん袖の露みなれぬおなし秋のはしめに

露を

大納言為世

こゝろなき草葉にしもおく露はいかなる秋のしら露

光明峯寺入道前摂政家に百首歌に暁萩

従二位家隆

きておける夜の露もさそふなり老のねさめの萩の上風

題しらず

前大僧正守誉

深草の里は昔にあさちふに露ふかくなるやとや

忠成思立秋天といふことを

土御門院御製

身にしめし秋の夕ゆかりもなく物思ふ我とおもひけり

題しらす　　中務卿宗尊親王

吹とむる嵐のさえも秋風にましはいつくめくらそてけれ

　　藤原秀長

何故に河のこゝろとてそそくらむ秋の色も秋の空

文保三年百首歌たてまつりける時

　　前中納言為相

山ひめのさらす錦のそめ心もしらぬ我か山の梢なれ

秋夕をよめる　　藤原基任

なかめよとおもはれぬへしひとなさむ人のおもはぬ梢の夕暮

前中納言定資家歌合に　野径秋夕

とふらしと　　法印長舜

萩原や露のうへふくあしたの風もよはに秋の夕くれ

文保百首歌たてまつりける時

　　前中納言実任

かけてみん駒もとめたる萩原に露もあはれにおもふ同し

題しらす　　三善為連

風そよく庭のをきはらちりてやとるこの月の影

　　藤原基任

月をとふこゝろの宿はおもふともひかりもや虫も鳴

山階入道前太政大臣家十五首歌に　秋虫

前大納言為氏

我のみや涙おちしも茂からしは覚えぬ孫をかくとも
おもはしんと　土御門院小宰相

茂るゝは秋やむかしのこゝろふるき枕乃下にもなくらむ

弘安百首歌たてまつりける時

静仁法親王

身と共の積りゆく光と契るらし秋山の端の月を見るにも

文永十一年七月七日仙洞にて人々に題をさ
ぐりて歌合し侍けるに月

前大納言為氏

いくとせに我身ふけそふ秋きけは長き夜の月によそへて

題しらず　永福門院

なかき世の人も同しなかめには月を我身もしたふ心か

皇太后宮大夫俊成

世をいとふ心のなをもたえぬかな我とこゝろや秋の夜の月

前左兵衛督教定

いく世かはさそへる秋の夜の月によそにはなれぬ老乃涙そ

百首歌たてまつりし時月

前大納言為氏

いくとせに秋の夜すから月みてもなかめなれても身こそ老にけれ

題しらす　平行氏

老の世ハ身にそふ物の涙とも袖よりうきあか月やみるらん

世をのかれてこもりゐ侍ける比月の前とて

よめる　前大僧正實超

たちまよふうき世の雲をみすてにし月も昔の袖にやとらん

題しらす　従三位行忠

世をてらせとこゝろを照せ雲の上のおさまれる物のよはの月

元亨三年八月十五夜後宇多院

月五十首（十五首）めされける時

前大納言為世

わかやとに又は物をおもひとけて六帖てあはれ月とみるかな

秋哥の中に　常盤井入道前太政大臣

いにしへをとひはてゝかへるもまし神代よりての秋の夜の月

度會朝棟

忍ふるに世のうきとも忘られて秋乃人そ月に嘆く

前大僧正慈勝歌合し侍ける時禁中

月　藤原親房

こゝのへの雲のかよひち秋はへて秋の中なる井の月はよるまて

紀伊国に侍りてもろこしとささめすへきこし

おほせしと侍けれは待つまにもろふ穀感

のよし仰せられて思ひつけ侍ける

法印隆淵

思ひきやくもゐの月にてらされて身を照らすへき光なれとは

建武二年内裏千首歌におなしこゝろを

よみ侍けるに花と月とてよみ侍る

乃中に月を　等持院贈左大臣

今はやくよそに雲ゐの月をみし我身のそてにやとる

あき月といふことを

法印長舜

あまとふやふりそなれにし昔にかへる月のかけは

山里にてよみ侍ける

菅原孝標女

思ひやるみをもや山里に秋の夜深き有明の月

前中納言定資家に詩歌合に山居月

秋といふことを　瓊子内親王家治アて

月みはとすまゐみやまの奥の独そなかき秋をあかさむ

法印弁徽

月の入かたは山陰に独さやけきさえて秋の

うきよりも秋の夜ふかき月に思ひをかくる袖やぬれなん

平氏村

藤原基俊

かり鳴やこの蘆かれにそ海のけしきはつまは浦まふかゝらん

善了法師

いねそふりけるやとはしてや山田もるかまにや鹿や鳴らん

今出河院近衛

たひねする宿はむくらのかれはてゝ秋よ林をせかぬのとこの露

源氏経

露霜のおくてのまゝにかれもみちあるかひの浦山にかりそ鳴也

家十首歌よみ侍ける

山階入道前左大臣

うつろひの秋りゆくはては霜かれぬ籬の菊のみそへとみまに

暮秋歌とてよめる

前大納言経継

ねよとて秋りゆくはよそにても露のなさけは猶やそれにて暮

九月尽日前大僧正道昭のもとより

けふのみとをしむ秋の夕くれに露まさる袖を老

の身ともしらてや中ていつけるかへしに

前権僧正良宗

暮てゆく秋のなこりの露けさは我袖よりそとひしらるゝ

思しらす

元妙法師

高円山かせのふきてゆきにうつる紅葉や錦なるらん

前大納言俊光

行くとてもいつまて何をとまつ虫の世にはかなくも鳴らん

秋をおしむ心をよみ侍ける

小弁

こぬつかのと惜しむもかひなしの頃や秋はわかれてかへらぬらん

閏九月尽の心を

源雅氏

限ありし残りの日数をかそへても猶一秋の長月の空

題しらず

藤原基明

さえあかさ梅にさき千村河原にかかる路は荒れそふ

心ある河風よ庭にやとらんと紅葉世にふるならひかは

鴨祐守

澄覚法親王

初河かえこのなをもめくりきて紅葉をそさそふ嵐

東宮に国ゆつりて世をさけける日寄

いのちやふかし碌々行きて

朱雀院御製

日の光そふるふの土にいつまて九重の山へかからん

御返し

太皇太后宮

白雲のかかりかかるや河原のかなしみ山のふかきなる

元亨元年九月廿六日亀山殿にてうへの
をのことも題をさくりて哥つかうまつりけるに
次に時雨雲といふことをよませ給ける

後宇多院御製

かきくらし志くるゝ雲もさためなきこれもさかのゝ世のならひかは

題しらす

土御門院御製

時雨ふるこのて柏の二面とてもかくてもおなし袖かれ

治部卿隆朝

我袖の涙いつりや神な月よそにはしくれ名のみなりけり

菅原秀長

よこ雲やしはしかゝらん山のはのあさけ時雨ふる空

平師親

はけしさも嵐ふきそへて神な月ふるは木の葉のちるしくれかな

平貞宗

なにはかたやゝ霜かれむくらせはきえて枯はさしたる葦の村立

二品法親王尊覚

秋すきし人めをまつも神て身さへふりぬる霜の下葉

亀山殿にて山家冬鶴といふことをよませ
給ける

後宇多院御製

山里は人めもまれに山里にあとさへたえて鶴のまつこと

題しらす　よみ人しらす

ちる人は志けき浦にかくしみ山さくらの露の下草

清原長兼

うきつゆの露の下葉あるとしも今は志らまぬ緑かな

貞和二年百首歌めされし時

正二位隆教

なほ上にかゝる紅葉も衰へなる時雨の色をかさねて

正中二年百首歌たてまつりける時

後照念院関白太政大臣

わか道やことはりも浅茅原つもる露に猿そなきぬる

文淑文部卿玉津嶋にふく和歌よみ侍りけるに
めけるゆへおふみちしるへせよ玉つしまひめと
よみしことゝおもひてよみ侍りける

紀淑氏朝臣

和歌のうら路の浜千鳥跡とゝめて世をしるへせよ
千鳥をよめる

前僧正道性

立かへる跡をつけても浜千鳥ことしはふるき道をしらなむ

入道二品親王尊円

わか道や君よこゝろの浜千鳥跡つけむとは思はさりしを
新後撰集入侍てのち玉葉集より入侍

なれはなるらん

僧正道順

ゆふ塩にありこし浜千鳥かよふなかなる浦つたひ
跡たえし行まよふ時千鳥なくなりて
よるなる

法印公順

ふしとも行かせもなかす河くまてなみよれは友千鳥かな

文保百首歌たてまつりける時

二品法親王覚助

ほのかなる声にかれ萬のよりも世になからふとふみても萬のあはれ
覚しらす

法皇御製

水のよよにかのうらのあはれさらむ立やハすまるなる身の中

式部卿親王

すゝしさや風にみたるゝ波の上に鳴るすゝ虫をそきく

菩提法師

鳴とりハつまとふ波に秋ふけて月のひかりに見む庭の池

建武二年内裏千首歌に

藤原雅顕之信

ゆふにあさ人もとてあはれ山の嵐の峰

前僧正道昭

ゆふしんと

あきなる夜すかなしく白雲のかゝる世にふりとて

同時鳴ふくもなく鳴けり

後一条入道前関白左大臣

よしさりきゝられ雪のあしたにもけさ山さへにふりそへぬらん

藤原基綱山里に待けるかひもつらかりけり

平泰時朝臣

風ませに雪ふりしく山里のあさけの床はいとゝさむけし

藤原基綱

忘れてもとはゆく山の松にまた雪をさへあさましき

大原にすみ待て雪乃ふる日数ふるさとへ今はとゝ

待けり

従三位氏久

雪ふかき谷の山の雪よりもとはいつかとおもひやるまし

題しらず　千観法師

まさしにふるあふみの雪のつもる山とそおもひける

四十九院乃いたもやれりにかゝる秋雪もなし

うつり風の音もしく吹待けむといへる

増基法師

浦風に我苦衣かりてもしく月すみわたる秋の夜の雪

題不知　頓阿法師

有明の月は秋かなて白雪のふりぬるたなきしるへなき

左近中将為盛

さえわたる光なき月を窓にあつめし雪は年ふりつゝ

百首歌奉りし時雪

前中納言有光

ふりつる月もさえまさる白雪のふりかかる松の梢にそさえける

文永三年十一月二日雪いたくふりて侍りける朝に山階入道左大臣のもとへ申をくり侍ける

前大納言為氏

ともにみし跡あるにはにいかにまて雪ふみわけてとふ人そなき

山階入道左大臣

ふみ分てたれをとひつる人よ白雪の跡あるやとはむかしなりけり

寄夜雑といふことをよませ給うける

法皇御製

月みてもおもひのこるこゝろもむかしにてそしられける

述懐百首歌の中に巌竈

皇太后宮大夫俊成

松かえの巌は我身やなきそれとつもそしらぬふかきあらしかと

寂超法師

あえしらぬ世にすまひつまれてまつ巌の松とそよそにみえさり

身いしらす

宣政門院

とはかなくつねなりのときはなき青といまにしらるゝ世を

津守国助

今日は年のくれとおもふにつけても日数なきことを
としのくれは　従二位氏久よりよりをとせ
て侍りける歌に　賀茂久世
あらたまの老の日数のいとまなて我身とともに年のくれかな
思ひしらす　藤原為清朝臣
行年のなきよの老と身はなりて昔にちかき春をまつかな
嘉元内裏百首歌よみてまつりける時歳暮を
後照念院関白太政大臣
つもりぬる老となりてはなかなかに流るゝ年のくれを悲しき
おなしき元年百首歌めしけるついてに
後宇多院御製
をしめともくれてはやかて行年の
なこりは人の身にとまるらん

新千載和歌集巻第十七

雑歌中

建武二年内裏にて人々題をさくりて
首歌つかうまつりける時秋天象

前大納言為世

なれぬる秋を独ねさめてはとゝまぬ老の友と月をみるかな

題しらす

藤原雅有

いつまてかやとらん月のさこしもん六十にかゝる袖のなみたに

遍照寺にて月をみてよめる

従三位頼政

有の人は汀よ影みえて月のみそあはれむかしの澤のいけ

題しらす

権大納言公明

久かたの月のかつらのもみちをもあらしふけてとはゝあき物哉

子雲法師

文永のころみまかりにける人のおもひにて

おもかけはこりてさおもひつくしゝかは月はかくてとおもひし秋

時分れい納れれい

前右大臣実雅方

曉ける月を時おもふにこゝろのうちにのこりぬるそのよはみきや

有明の月をみてよみはへりける時月と

後西園寺入道前太政大臣

おもふ事ありとすみけるなん哀にて世の蓬生の月

元亨三年八月十五夜月五十首歌講せ
られけるに秋月といふことをよませ給ひ
ける

後宇多院御製

照月の雲ゐのよそに成ぬれはおなし世ともおもほえぬ世
影しらす

前右兵衛督爲敎

見る事はいつ迄とてかこのみね月やむかしに似さる秋をみん

津守国棟

月影はうつりぬ物とさやけきは見るへかりける老となるらん

法印定恵

名にしおふ月に昔のことゝはん行てはおなし面かけりけし

大江茂重

月そみむかしにかはらぬ光そへて露の庭なるよもきふの宿

民部卿爲藤おほやけのみつかひにて遠境し
侍ける時越といふ所にてうたよみ侍けるに深山

月といふことをよみ侍ける

柏秀房

とまるしも色ありみ山の月影をはなれとやはなれしに雲のかよひなん

仁和寺にまうてしてしはしこもり侍けるに
家にかへり侍る秋月をみて

邦世親王

山里の秋よりからしはひさと都の月はうち絶て
世をのかれてのちは月のころをとてよめる

法印定宗

をしむへき身をとふはとし山のはに入てそ月を絶てこそ見ん

元亨三年八月十五夜後宇多院にて月五
十首の哥めされける時雜月

二品法親王覚助

めくるあかぬ心あるまてあはれみの月の霜にそ身はふりにける

建武二年内裏千首哥に述懐

二品法親王慈道

我君をたのまん世をはのかすにいたるとも思ひしらす

平宗宣朝臣

なほしかなしき君をそ頼むあはれはしふしのひとりも身はなるなれ

禅休法師

よるまての柳のいとをかけて身をまかせたる世に嫌ふ

前権僧正慈慶

三十まてあはれしるつらきに出てつかれたえてしさへ

入道前太政大臣

つかへにし君まてをはらに五代をへぬる宿の星行

後光院入道前関白太政大臣

九重のみきはの竹よ遠つ代にたえぬ昔のあとより
述懐の歌あまたよみ侍けるに九代乃朝
につかへぬることをおもひよめる

前大僧正道昭

九代の君につかへて身を一ぬ老ぞことし身ぞ思ひ知られて

百首歌奉し時　前大納言経顕

くれ侍る六十九老の行さきをおもひつゝ
春日社にまうてゝ奉りける三千首の歌
中に　前大納言為世

身をさてもつもる我身世にたえぬともしる家の
道しらず　よその人なる

浮かれはさむるゆめの世中にたつそてとまる関の藤川
嘉元百首歌奉てまつりける時河

一条内大臣

たのむそよ関乃藤川岩まてもとゞこほらぬを君にかよひて
述懐歌の中に　右大臣
三代まで代々にかはらぬこゝろえて君によりける流ふる身の関の藤川
元徳三年四月一日内裏にて人々題をさ
ぐりて歌よみ侍りける時祝の心を

後光明照院前関白左大臣

ちはやふる神代の契あるえと世すともつたへてこそしるら
むしらす

前中納言宣明

はるさそひさしきまてかはるなに世をはしらしとも我か身の

前関白左大臣

なかきよともはもてぬるてもみえすなりゆくはかなの川波

後光院入道前関白太政大臣

はかなかりけるふきかわれともふる老の波よりあまる袖かな

百首歌よみてまつりし時述懐

前関白

みちまよふなかれてはかなの世にあまるもとなかれ
あはれしれとも

権大納言公忠

はすわすれかたきあはれの世のならひはあきなき世にもあらぬ

よみ人しらす

見えきひかけのはかなき源の月かけに世にもあらはれやすらむ
大原やおほろにてまつりたまへるをみ
待けり

法印定為

霧ふかき秋のよそにかくれ大原のおほろけならぬ志るしにやすむなと
おほし一節よとて侍りける藤原為藤
てらしのなかにて見えはつきけるあまく

ゆくてさへかはらぬ月にたのしき雨みく
かほよやとまちけるはいとひつらしけり

寂然法師

たえぬる雲ゐの月をやとれはおもひしたむる袖のなみさ
花しらず

前大僧正公澄

風さはく川の柳の下をにんの水てうかむもみち葉

建武二年内裏千首歌に

法印雲禅

ふりゆかむ河の流れもおもひとけてすまぬにことのはにしたかへ
述懐歌とてよみ侍りける

法皇御製

あはれのおもひとかけし山のなかにかさてはすむかいはほ
なきくにと侍りけれはよみ侍る

建礼門院右京大夫

いたらぬ絵を来りしにすあくまてんと給へるところ侍り
絵に女の月なかめたる所にあきつきを給りけり

道命法師

とさくしも我身ひとつのなかめのこのよにまよひぬ
いつしかなき給へるわかみの人みなともにまちけ
りてあくとなり給へるけふにかさて入

侍けるに　　前大僧正慈鎮

むかしは文庫の窓にたちやせんつるの子とこそならねとも

亭子院おりゐさせ給ひけるにあか　　三條右大臣

かくれぬる世にはいつそらすまるへきおもひやまちかくゆるみぬると

貞和二年百首歌めされし時　　正二位隆教

とふらひしもとを世ならぬのみちそつきせぬ岩代の松

百首歌たてまつりし時眺望　　前大納言公蔭

高砂のみねの松かこのまより夕日かけにゆくあはち島山

山家　　権大納言実俊

軒ちかき松の嵐の音もむすふ枕にちかく瀧の音かな

おりゐまへさせ給ひてのち人のもとに

いさられはよませ給ひける　　後京極院

人しもしらんとこそ松風の声をきくにもおもひ染

世をのかれ行をねかひけれは　　宣政門院

今はとてそむきはてにしおもひこそ涙の露のかかる袂に

題しらす　静仁法親王

我みくも宮の呉竹ふりにけりしつみて昔いつの世かあらん

貞和二年百首歌たてまつりし時　入道前太政大臣

うへおきて人もむかしの我友と昔の世々の宮の呉竹

述懐歌とてよめる　源邦長朝臣

うれしくも身につたへ来し呉竹の世をかさねつゝよをそふさ

土御門院小宰相

里遠き竹のそのふのちる柴の思はき身をや

入道二品法親王尊家に百首歌よみ侍ける時竹を　法印浄弁

はえゆく竹のそのふのなかりせはいかてかけふに身をはうつさむ

文保百首歌よみ侍ける　忠房親王

呉竹のそのふのなかやいくよしもこれ君か代にしけるらむ

百首歌たてまつりし時庭竹　二品法親王尊胤

ちきりなき竹のそのふの世々の千枝に鳴そつくらん

題しらす　二品法親王慈覚

うゑおきし世にならひぬる竹のそのふ身にしらぬかはうらやまし 外

菅原業清卿下

あしたの袖にかゝりて篳篥の世にたえぬをなけき侍りしも
又中納言資親に笙をならひて秘曲ともつたへ
侍りて又狛則忠に笛の大曲伝侍りし時思ひ
つゝけ侍りける　中納言資頭

篳篥のふるきしらへをつたへても絲竹にかよふ一ふしそなき

亀山殿千首歌中に

前大納言為世

君に我かくむまてつたへきぬひとふしなれたることのねを

康永四年春日の社奉納侍る大臣三代集

侍父のよしきゝてみちのあるもとにこひ
こひ給しよしのまねひをそへりし侍
てけり　入道親王覚誉

家の風あふきつたへてあめのしたなひくかたことにそはれ

返し　前大納言為定

あまつ人かはりそはいふ家の風吹つたへてくもゐをそしたふ世に

百首歌の中に寄市述懐といふことを

民部卿為藤

なかりせる市人の心はいかはかりてもあれなと

嘉元百首歌たてまつりける時述懐

正二位隆敬

あまたの河へたてしいにしへをきゝて渡よ雨よふ敷嶋の道

雅明親王家の十五首歌に

前中納言定家

天地を何遠しといふ古の人の跡をたつねし敷嶋の道

述懐歌とてよめる

源和氏

見ぬ世の人やいかにおもひしらんもいかにしき敷嶋の道

古今序の詞まてよみ侍けるの中に

僧正業海

敷嶋の道はわけみるあさき山ふかきさかといふてしるまし

思しらす

丹波敦長卿

埋もれし世の古の跡は何遠しとしもまよふ敷嶋の道

大納言殿實母國くにの所と思ひて人々よませ侍りけるに選山を

よみ人しらす

志き嶋や道しきたえふる山ありてそ世の跡もたのめ

百首歌よみてまつりし時述懐

二品清親王若渕

しひきや我ゆく松の跡ふきてよるゆくひとさかわか見えと

めくらん

観応二年冬親尊法師身まかりにける
よし澄尊法印よりこゝろ累代の跡
ともつきを侍けるよしいはれ

法印澄俊

思ひきや七代の跡をうけそへて光の道はたえつくしとは

按察遠使別当よりて融りしめとき
なりける時入道内大臣あるそひく扶持し
侍られはとひつけ侍ける

按察使實継

七年光の跡まておひそへるわかやかれのうへに身をとしまて

蔵人源兼治か還昇のよろこひつかはすと
てよみ侍ける　中原師宗郷下

我君のめくみそ空にしられける文あちのあとの雲の上人

貞和のころやよひのはしめつかたまへおほ
すること侍てはしめてよやかなとくり侍し

按察使資明

生ひてをとろかれ庭の下葉は春めくころにあふひはゝし

返し　前大納言為定

おひ出る恵をたのむ春ふかみおひをとろかれ庭の下草
行きさめしのはた右え猶つさりまれはよみ

続けり　　大納言綱光

思ひしる和哥の松山のむかしにも波よせかへるまつそうき

述懐哥とてあり　権中納言宗綱

位山まよふ人の跡そともいま一さゝとあくとふ和

大納言の家にかくふることあり続けり

年のくれはよろしみ侍りき

前大納言公藤

位山の跡をもやらていそきぬいそらけれ侍りとこたへてん

貞和二年百首哥よみてたてまつりし時

前大納言為定

たしく老の侍るに位山ちと越えたるのあとをたつね

のさかふるとこたへに続けまいらせ梅家仗

実継卿中遂侍りし

権中納言為明

のあとえなこれ一侍りけるにたのみの道を我もふかき心

これをさすらしめして侍るし

御製

たちかへりいまも末をおもひしは一侍りけむ和哥の浦波

文保百首哥奉りし時

六條内（右）大臣

信夫山のおくそことなくわけ入は松よりたかき月をみるかな
題しらす　前中納言基成
いそわまて信夫の山よいかにしてそのおくまてをすむ月をきく
惟宗忠景
なかめくるわかみちのおくまてと月のかけわけゆく末を思ふかな
よみ人しらす
月を捨てかよひしみちはまよひにき山かくれ世のうきに思ふらん
周嗣法師
山里にのかれてもいとし世中はうきこそいとふたよりなりけれ
弘安百首歌よみてたてまつりける時
安嘉門院四条
庵むすひてもむすふ人にみえしところもかくれの山そたえぬる
題不知　平宗宣朝臣
世中をいとふ今そいとふさき根なきこゝを思ひはてして
二品法親王寛尊
とふやも月に待よのをもねまつらんふたつのむつ行末かなし
文保百首歌たてまつりける時　三条入道前左大臣
何かまそむくかの待まの月におりてまたいとへ（世と）
述懐歌よみてはへりける　中務卿云宗一女

すてぬ世はうれしと何思ひけむなかなかにうき秋の月みし人

大江知行

つれなしやさてもへぬへき世中におもひにおもひてすてぬ身は

大納言基良

世中をいとひしるやといふ人はなからふる身をとふ人そうき

前大僧正良栄

そむくへき心をそつれなくてうき世をたつる涙なかりし

平氏村

我むそはなくまよひし世中にいまなくはつれなからん

観意法師

おもへはたゝたのむにしてそ我身をはすてぬよつまてさかりもぬ

入道二品親王性助家五十首歌に

前大僧正禅助

世中にすむかひもなきいとふ身はいかにひとすちの心なりけれ

住吉社にて法楽し侍りけるに

法印實性

行末をたのみしもとめてさためなき世に身をやすし

権大僧都宋観

うき世をいとひしにはいかにさためなき身はおもふにて

源盛頼

数ならぬ身ハ中／＼かくれなくなしひはてゝ歌よまずとも

百首たてまつりし時述懐

入道二品法親王法守

かれはてし行ゑかたみのねさめにて身にふきかへる袖をぬらさん

文保百首歌たてまつりし時

後照念院関白太政大臣

おしからぬ命つれなくながらへて今はうきよにめぐりてやすらはん

不義而富貴於我如浮雲といふことを

惟宗光庭

身にあまる我をもよしや中空にうき雲なしてかけましや

六帖題にて歌よみ侍りける中にかんなきを

前左兵衛督為成

波のうへにうらへをたてしかみならはきしとこそいへよをもしらねは

題しらず

法印仲承

いとゝしくなみのおきなる世なれとも心にさへも一ふしをかな

寛治百首歌たてまつりける時江葦

藤原隆祐朝臣

おもひつゝ難波のあしのよをしのひ入江よりこそやまこもりけめ

前大僧正慈鎮

みちのくのよはひのいりえよりこそつきて侍らん

みちのくてかくれけるよの中こそなみのふかきの

こともおほゆなきよにて行けるを立かへり
いにしへしのふおほうちはしゝはかゝ
かつてしらしそみちに行きてある
小
前右近大将頼朝

おほかたはとしつなみにくらふかさりきかたるかそ
花しらす
菅原敦時

わか道やたえを思てまなつかしきよまてよむそ外
建武二年内裏にて三首に花をよみて
みてまつりける時雑勤ほとふとと
津守國夏

わかの浦やみさこのあれのまつり身はこのもとに
寛喜元年女御入内屏風に寄哥
従二位家隆

和歌の道やへたての葛の霧の光よりんとや
むかしの中に
花園院御製

年ふりて世にかくれたるもの哀と立よりけり
述懐の心を
清原實基

わか道の夢のうちにて見はてぬ末を人
貞和二年百首哥めされし時
後二条前内大臣

子とふ波にへにはよるみつしほれはてぬやねにまたなくこと

題しらす　従二位氏久

身のうきにおもひしみにならはれぬとおもふ時につけてもねになきそまさる

菅原在任

思ひやれ子をおもふ鶴の一こゑに道まよふなかにおもふあはれを

元亨三年八月十五夜月五十首よみ侍り

雑月　前大納言経継

月そともなくなかめはなそともしらぬやみに子をおもふらん

題しらす　前大納言為氏

あまのはらありてもよそにへたてつるもとの心を月にみるかな

日吉十禅師社によみてたてまつりける歌の中に　前大納言為家

そむきえん親のいさめにしたかひて法のしるへを知るとしるへや

後西園寺入道前太政大臣のむすめ一人

のこりて侍りしもはかなくなりにしを思ひ

てよめる　前大僧正道玄

これ身とて何のこころもなかりしを思ひそむくはまことなるよ

いまは又僧に侍りし時世のつねに維摩

講師せんとみ侍りしに身にかはりて

のちかへて後結ひまいりてなしへてけり

[illegible]

権僧正永縁

うゑおきしまつ昔にて忘られぬその枝とみるにつけても

建保六年四月中原師光卿下にて平座の題人來あてよみけるに

とりわくるいそのかみ師重卿にもおくりける

つかはしける

前中納言定家

忘れぬとさきの草葉にみえしまて庭の松の葉のみ緑なる

返し

中原師重卿下

名のみ草葉なりしさきそともに庭の松のへたてもかはらす

述懐の心を中に

信実卿下

沈みこし秋みちとせの年ふれはみのむかしの名をつたへつれ

藤原信良

みそちの世の一ふしとこそ世にありてもみれ

前参議為長かさまさまにつけつゝ抱きしき

みとめ得けり

菅原長衡朝臣

りかみのさきこの葉にいくそとも春とわか庭の雨にふりさ

返しらす

前中納言有

かさつつ昔の紅葉をみるにつけてもみ身はそれ家の庭

新後撰集にもらしめてうれへをうけ侍りける時

よみ侍りける　祝部行氏

今よりは家の風そつたへんなさけをうけ神のわか櫻

題しらす　権僧正宋縁

年つもる松はしつゑん昔より吹つたへたる和歌の浦かせ

よみ人しらす

しきしまのみちをやはらけまもらしこれは代々のわか松

続後拾遺えらひくたされける時集のさた

むしにそちねのしおほせとりしり

て大納言師賢につきて奏せられ侍りし

前大納言為定

今そしるあつめし玉の数々に我身をも照す光ありとは

御返し　後醍醐院御製

数々にあつむる玉のひかりにはこれも我代の光とそなる

続千載集えらはれける比御方たかへにおはしまし

て後醍醐院へ参てまつらせ給とてかきそへ

られて侍りける　達智門院

玉かしはしけりつかへとも和歌の浦に君かみかけにとりあつめ侍る

百首うたゝてまつりし時浦松

徽安門院一条

玉よする波ものとけき此代まては風もしつかにわか浦波

續後撰集奏覧の本をつかはすとて前大
納言為家卿のもとへつかはし侍りしにみつからの
つかはしゝ　等持院贈左大臣

玉をみかくと光そへよといにしへの跡もしるきわかの浦なみ

返し　前大納言為定

わか道の跡にそとゝめんまよりそふへき玉の光をそへてみつ

雑哥の中に　後伏見院御製

よるの浦やうら人かへる月をもて見しよはしき玉藻かるなり

續千載續後拾遺ふたゝひの集より見侍る

しとなけききこゆるによみ侍ける

信專法師

光なき岩まにしつむ身もいまさらにあらはれし玉の数に入なん

前大納言為世三福寺にて睦月の頃よ
哥よみ侍ける時述懐

示證上人

なをとめし跡をみてそれもかはらぬ筆のあとをたつぬるわかの浦波

文保百首の哥たてまつりける時おなしく

従二位為子

わか浦にたえぬ波のなこりをもむかしをたてゝよるそかなしき

題しらず　前大納言爲氏

名をかけておもひもふかき和歌の浦に年ふる老の波ぞよせくる

貞和百首哥めされし時よみ侍りける　法皇御製

まつりごとすなほなる世の思ひよりゆくさきにまよはぬ和歌の浦路

百首哥奉りし時述懐　等持院贈左大臣

秋ふかきおもひの風吹しよりつきも波のあはれぞそへて

おもしろきを

わが心なぐさむ程のよきもなきたよりありける浦

百首哥奉りし時　大納言朝實母

和歌の浦やそのかずならぬ人までもなほあはれかけよ玉津島姫

題しらず　法印浄弁

いかに世をおもひすてゝも身をあさからぬ

わが宿の人もしめてしら浪のうきて住ける

惟宗光吉朝臣

数ならぬ身はみちに身をふる心をかけし和歌の浦浪

述懐哥とてよめる　藤原雅朝

わかの浦にふる汁の名はおきて昔に和歌にかへる浦かな

續千載よみけるとき續後拾遺にまゐりて侍ける時讀侍るとてよめる

行蓮法師

まねらしや和歌の浦にも濱千鳥しらぬはまよりねとのこそ　吟

題しらず

性遵法師

和哥の浦よりなからふ舟のつなてだにもさへおちて濱よる

法印實清　性イ

和哥の浦や昔の跡の浦もまた花の都に海よる

建保四年春藤原秀能五位尉にて奉る

舎利ぬ人のしとりてその費に生田守

萬し給ふあしはらにふれて侍りける

津守経國

おきつ風かせのうらによするしら浪の白濱の波よせくる

返し

如彰法師

白濱の波よせくるしら浪のかけの枝にあしのまにまに

題しらず

法印果守

玉津島浦の花は木すゑにあすも春にとはぬあさかな殿

百首の歌よみてまゐりし時述懐

前内大臣

一時のさかりはいかはかりやまふきの花のもとの末

題しらず　　藤原兼風

なけきこそ身のおもきにはつもりぬれ山のやまひといつかなりなん

正中二年百首歌たてまつりける時　　大納言師賢

河上のよとの松人は世にみえすたきつ瀬のみともにそなからひと

貞和百首歌めされし時　　右兵衛督直義

うれふる人のあまたとも思はすはちかき世にこそかはりはてなん

述懐歌の中に　　左近中将義詮

ともに世の人よりさきにすてられてくにのためやむことそなき

百首歌たてまつりし時よみ侍りし

世中は人のうへのみかはるなりわか身はなかれにすてられ

建武二年人々に題をさくりて百首歌つかうまつりける次に述懐歌とてよませ給ひける　　後醍醐院御製

身にふれていふかひもなき世やたみのこゝろをあはれむこゝろさ

百首歌めされし次に　　御製

なにとさりにたふるゆへかと立かへりかきまよふ世とかなしかるらん

題しらす　伏見院御製

世をまもる神のちかひのあはれとさりに民のうへをなほすそゆかしき

新千載和歌集巻第十八

雑歌下

太神宮よみてまつりて世祈りける雑歌の中に

後鳥羽院御製

なかむれはそこついはねに神ねまもむかしき宮ゐよの嵐に

延元百首歌めされける時

後醍醐院御製

これ生しむかしこさ舟のよるへにもあつかふましき世を渡るかな

題しらす　花園院御製

今は我むかしこさ舟のつなてまてなくさのよさ一とせ

百首歌の中に
雲とふむ峯の桜はちりにけり世をわたるとそおもひ
しらす　　談天門院
徒によそにみる月日のいのちをかそへさ命あらはや
　　　前中納言定資
とふらひやとりぬるさまのひとへになるらん不満世はん
権中納言通俊後拾遺集えらひ侍ける
比周防内侍かもとよりかくいひてもゆるしく
こそなけれにて侍られは中あらせくへきとて
いまこそさまられし世あさをつくしありけれ
なをてらへしをくらとてあさらぬんそみ
ゆかりとふかくし世さいまし玉ぬるなり
ねもころにもなく侍けるなり
　　　権中納言通俊
世さいつてひろへる玉をきなみんくとそ人の心よ
とよみおくをとをそにさうしめしけり
年ふるしあまたまうすとて
　　　後嵯峨院御製
雲の上とこそ波の音まそめつる色をそ君よろこはん
也し
　　　後一条入道前関白左大臣

人はさしもまとひてぬる我袖にくもふかりけるはまほしと

左近大将にて侍りけるはひらのみかのみま

さきり草をそまつりそてよみ侍りける

大納言朝光

君ならて我のみまれの露草もおもひは色のまくに（そえぬる）

建武二年千首歌よまゝせ給ひける

後醍醐院御製

九重やちらぬまゝに内遊て家をもとはけれ我宮は（かり）

後深草院の御位のはしめころさかれける風へ

むかひて侍けるふかきのきそまつのくてさとまて

おもして宮庭のつゆもひもはつかしく

けるふかれもかしあふやきや給けるにも

うつもゆくめさとむひくせめれけるは

弁内侍らくへまえて侍りし春

少将内侍

しめりまてらすひらのきくてとかえる時のまに

ほやて侍れけるくとつかすとて

弁内侍

かくてみさしかふかきの時まもよされるみて我そこと（[illegible]）

代々関東の吹挙まて昇殿ゆかりこと

とゝひて月のかつらにかけの秋風にいかにふかひ
てよるか

藤原保能

雲のかゝるみやまつきてもよる月出る方をあふきつゝ
や

海とほく清見かたぬきもしるしもなしとてもにて月の光の
そ

照らしらす

藤原宗秀

花はなほあかぬ気によそへて海ともなきこのをかはし軍

信快法師

後の世とくやなきらん身のおさはなとのまたえぬ人を
ハ

徽安門院一条

いかゝ思ふこゝろを歎くそられ世とこゝろぬくなりぬれ

今更にうきとしもとておもへとも世のうきとこそしらぬ
つ

宣光門院五条

数ならぬ身にも涙のかゝるやいつまて山のはの月を
見ん

安嘉門院四条

あけくれに果ありしかのまゝし待たれし月を

入ておもんちらしてとひつるを待けり

大僧正行尊

あはれともいふ人なしのさしもいまいつとなしといかにせ
ん

世をのかれてみちなちにましてく待なるに

そのころ千日乃山こもりし侍けることありた
りいて源のりにきつけ侍ける
法眼慈融
みな世をは源乃為にとそむけれとふかきまことの袖ぬらしけん
山家前とてよめる
法印能信
山里をはひとなかりけんかれてこそすゝ深くなる
建武乃ころほひのかれとにまかりて心をみ
つま侍ける稚児ありのかりて侍けるに
ちやこれのしなきさて侍ける女はゆさく人
侍よしをきゝてよみてつかはしける
左兵衛督直義
袖のうへにかゝるときけハ旅衣たちかへりても我そ露けき
題しらす
藤原宗秀
そむきてもなを世中にまよふ深のみれ袖やぬるらん
よみ人しらす
我そむきても世にすミそめの袖ハかゝる思ひの露そ我身に
兼清卿
のかれても身を遁る世をこそ猶といはれぬ宗にとくそむきまし
等持院贈左大臣出家ありてのちかくるあひ

ふるく読侍けるに　源信武

捨られしのちのうきよハいかゝせむ山のおくまてとか

ぞしらず　定顕法師

かゝる事ならひつきてぞ歌の身ハ捨てそいとふ我なりし

建武三年八月廿八日大覚寺回禄ありし

かハ古代よりひさしくなんとゝめられて道

光せられける諸堂ならひは房舎ともに

つゐえてなく時のまに煙となり侍れバ

さまさまに歎きさゝ山中にほかとひたりき

侍けるとたれもひつけ侍ける

権僧正道我

世中にあけぬる時ハ身ひとつをかくしつるなと亦かゝるをりに

百首歌奉りし時　山家

前内大臣

おりくのえやむ業の哀いまハ身にしらるか

おもしろき　花園院御製

寂しくてゆくともせぬを未方の時ハ風いまハ嶺の松風

貞和百首歌奉られし時

中宮大夫公宗母

おのか三木昔ハよそすなとこそ我も古ある宿松かえ

題しらす　　永福門院

山里は軒はのみちの椎しはの末のおとそ世よりまさるあはれ

前大僧正道意暦應三年秋の比津国
神呪寺といふ山寺にこもり侍けるを
海よりみくつかはしける

秋くふかき枯ぬるひとつ松いつまてとてかくちはつらん

返し　　前大僧正道意

くちはつる一木は松のけしきとそ枯ぬる枝もあまたみえけれ

題しらす　　よみ人しらす

庭の色のこ松年ふとも難波の風をつたへん

津守国夏

いにしへのなからの橋もはしの名のみなからへさせぬ世の経

雅成親王

世をうしと思ひさりける昔そこの比よりもうかりけれ
世をのかれて後比叡にすみ侍ける

権律師恒瑜

のかれてもやましき世とてふかき山にこゝろは猶も昔

題しらす　　法眼慶忠

とひきやな世のうきことをいとひても昔をさまよふへしとは
世中とふかくいりにけるはかなさ

としきく

後宇多院宰相典侍

わかふのこと命もあらて宿世の夢とみるそわさ

返し　従二位為子

思へすよわらぬ身の命のことわりつくしはかられめらん　とも

千五百番哥合に

源家長朝臣

袖ぬれて秋の床をさむみ夢をとへる松風そふく

正安二年七月七日内裏にて七夕講せら

れけるつ次に題をさくりて百首哥つかう

まつりけるに嵐破夢といふことを

前大納言為世

いく秋かみてぬ夢のなにおもふ松の戸さゝく峯の嵐よ

暁述懐といふことをよませ給ひける

花園院御製

秋をまて枕のうへの鐘の音に五十の夢そ覚みはさき

貞和百首哥めされしとき

後岡屋関白太政大臣

昔より思ふにかなふ夢ならはゆめ来ていかにうれしからん

題しらす

三善遠衡朝臣

わすれしと我心にもむすはれし見る夢わかためは心につりさすらん

法印實性

うつろひ見てもとしそたとへるさくらにつる花もみなれかは

安嘉門院大貳

心なき猿のゆくのみちふかまよひさて花とおもふおもひゆくらん

為道朝臣

うつろひしまよひみんそなのむら花みゆくも世中

前大僧正覺實

花そのこゝろおもふ物と思ふそうつゝとなのしまよひぬけ道

大江廣茂

おもふらん風花てふ物そうつるみえて風のなとふきれは

世中うつりかはりけるはしめつかたねとこさ

こゝろえられは瑒子内親王よりこまやかにかたらひて

おほうへあるその花のとしれとさらやくぬ世にて

待まつらるゝ

瑒子内親王

歎きしひしおもひそ花のたよれとも行きよる身さへつかれ

曉述懐といふことを

雅成親王

花みれはよそになりてはおもひのこる心の行むかしの曉そかなさ

田家を

恒雲法親王

足引の山田よ行きかへりさて風庵よくとうさねは梅かれけり

弘安元年百首歌たてまつりける時

藤原為氏

東路のおくての山田かりにのみこし庵もとしみなれにけり

述懐百首歌よみ侍ける中に

藤原基任

我とてもなかりし月となかめつゝやよや人のみならん

影しらす　よそへしら沢

法眼行済

呉竹のふしみの田井のかりほにも世をおもひしてやすまとおすらん

よそにこそきゝしあきはの鹿もなく山田の庵とふ風やすくらん

兼宣上人

秋かせもさむくなりぬるよりも山田のいほのかり庵

前大僧正兼覚

もろ人のなみにはつまてともまとむにし月を秋かさゝ小田もる

源兼氏朝臣

秋かせの山田のもるつゆほしとまるや旅人とたゝなにかなへ

按察使資明

おひてふかきもひとわれひつちの田風寒きいてくさしく月をみるかな

藤原長能

けしきはいかにたのむしたさへかはやいつの秋月や

元亨四年二月坂本にて十首歌よみて
まゐりける時河上舟

前大納言実教

のぼりえぬ一すぢによらむ川舟もへ人のくはさてやたちかへらん

題しらず　中臣祐臣

山川の石（岩）かねつたひよゆく水のやまずもはすまさねど世はへけり

橘義貞

数ならぬ草にかくれ行水のひかりもなくもたえぬ世を

津守国夏

みなと風ふく江の波よ打よせてよするかたぬおきの釣舟

元亨三年八月十五夜坂本の月
五十首歌に　前大納言為世

月影のゆくさきすがらみなと江によるさへおきな浪の舟

題しらず　前中納言雅縁

歎そよおもはれせまほる川舟の行もとゞまる世にとゞこほると

源頼貞

とゞめぬ月日のうつりにまかせこそあはれふかくに世を渡るかな

貞和百首歌たてまつりし時
権中納言為明

うきてなほこゝろみしやとほをともなみのうへにそこ
しら

題しらす　従三位有能

かくれ家はいそちもとめぬいそちみのふかくもなきうき世なりけり

法眼源意

うき事のしけさもそへてねかはしくなるへきものは世をいとふらん

今出河院近衛

うきなからなれしこゝろのさとりなはいつまてもなくそむきはてなむ

前大納言良季

うき事の限もあらは世なからへいそしとて我身をおもひ出しけれ

前右兵衛督為成

おりてすみかそりはうき世といひてなそなりけり

文集我若未忘世雖閑心亦忙世若未忘我雖退身難蔵といふ心を

前大僧正慈鎮

世をもいとふ心のうき世にもいとはてとゝまる身のなをそわすれき

文保百首歌たてまつりける時

大僧正道順

世をいふ心はかりやかくれかのすみかはすまけむ山のおくふかく

はまうへしとしひあちきなしきえにけり

人々

為道朝臣女

いそのかみふるの山のおくにすみてよそにきくかなうきよのなかやらふ人のなき

題しらす　道賢法師

はなれさらぬ世のうきよりはいとふかくさめてんそとめる山里の庵

嘉元百首歌たてまつりける時山家を　従三位為信

うきも心とまらは山里もうき世にはかはらぬすみかなるまし

百首歌の中に　花園院御製

なかつゝ人よそにしきらんそつゐふらぬ世のちりと見ゆ

雑地儀といふことを

足引の山とふかき世のつてそみくちりのさらひは知はなえ　まき

山家とよませ給うける

柴の戸の月そさためて見えつ山へは我のみ独すむとおもへは

題しらす　よみ人しらす

世のうさをみえぬさかひも山里は住なしてこそ思ひしりぬる

あはれ世をいとひすてゝも山里はやすき我身なりけり　大僧正忠性

数ならぬ身の思ひは山里の人め稀なるすまゐなりけり　法印覚海

今更によくやせりける山里にすみてそれ世をなに歎きけん

百首歌たてまつりし時山家

尊道法親王

いつはりなきを山ふかくのすまゐにはむかしのあとのありせは

題しらす　　よみ人不知

心あるはなそ此浮世をもすてさかしきこゝろは心をも世なり

世をのかれけるときゝてつかはし侍る

いかにしてうき世のかれつる数ならぬ我身のうきも捨はてにけん

弾正尹邦省親王家五十首歌中に述

懐　　法印實性

としをへていほりかくて世にあるも心さひしき山家なれとも

題しらす　　栄寶法師

捨てこそ高き山路よりふかくも入らぬ世なりしを

久しくもすむへき山はまたけれはのかれつへくもなかりけり

よみ人不知

くるしさをなにかけてもおもひける人の心そかはらぬとすまれ

世をのかれてよみ侍ける　　賀茂基久

世をいとふ人のたくひをおもひしよりしけきやまにのこりけん

兼好法師

またあたら世のなかりけるにとも山里もなれ

題しらす　　後山本前左大臣

なきかけと何をかいはん山里ハたゝむかしつきてそさひしかりける

寿暁法師

山里ハ住まての梅そ心ある人まね岸乃雲そ

文保百首たてまつりけるとき

後照念院関白太政大臣

ゆくすゑハわか世にもあらし昔をこふるなみたなるき

懐旧乃心をよませ給ひける

院御製

世をやすく治めよとめてし道も昔そなくさめのみて

永福門院

こしかたを思ふ涙の玉つきにてこそおもはぬ時そなかりき

前大納言實教

見しよのさかりなれハかなしくて涙そこの昔なりけり

獨懐旧といふことを

前大納言為家

とふ人も思ひつきてねをそなくよはふくさ昔にハにて

題しらす　よみ人しらす

としたへて忘れしもそいふの昔をハいかにて袖ぬれ

菅原秀行

袖ぬらす花のなさけも涙何ことの上ハむかしなりけり

よみ人しらす

こし方を思ひ出れは嘆乃袮覚の床やなみたにしほるらん

津守国道

こし月もさも見えしの昔哉ひとつと思ひ出て

平宣時朝臣

なに事もかはる昔と思ふそよ人をまたへし思ひてそ見る

平政村朝臣

思ひ出るねさめの月のてらすにも我なからしのふ昔成けり

法印長舜

立かへり我いにしへの忘れやおもひしらるきに月をみるらん

前僧正實伊

わかなくはわつかのちるは世として哀昔のこひしかるらん

藤原泰祐

いにしへを忘れさやかなるいにしへも月数ならぬ歌をよみてせし

鴨祐光

うちも見ていそかれてもとも思ひなりぬる世にはあまたの歌とよまに

従二位氏久

七十になるほとまてもかそへては其日数のかけそこひしかるさ

法印延全

めくりあふ昔のことそ思ひつゝ花の数そふ月をこそ見し

寛尊法親王

いたつらにすくしきてよにふりぬるハをしき月の影

文保百首哥たてまつりける時

前中納言雅孝

年月のつもるへてもなき物を面影にそふむかしなりけり

権中納言公雄

あやまりにあらぬ身の影なれはそむきしをさそふ老の心よ

建武二年内裏千首哥に述懐

前僧正桓守

としたかくなりぬる世の老の身にさめへき坂そちかくなりけり

題しらす

津守国助

なにことやいはゝへてそと思ひきや老て波のよるそなけきつる

前大僧正實承

ともとなる昔を誰にかたらまし老のむかしの友もなき世に

前僧正公朝

この世をもちかくぬるとおもへはやさしすゝに老の身をみん

題同

聖武天皇みちのくにしろかねの家よりゆきさゝけける時のみかうた

よみ人しらす

見る風もなき猿のやまに玉ぬきとめてならゆきあひよ

おほくもの　まとにみえつゝ　とゝろん　よしあけまハ
こゝろのこ　世にかなふ　あめつちに　神ともせて
たきまの　ゐにさて　わか為と　なのめこよひ
かきれよの　りよあらさ　あつかひもと
久安百首歌奉りける時のなかうた
大炊御門右大臣
山のへの　おともつきぬ　月にも无　さの人もすふ
いりしたり　萩の露とて　まつなき　月の絲まと
なかひさく　人まつけぬ　といかなく　まなかしなと
うち出くと　ひかりのさき　ことのきれ　こけるもの
ゆきまふく　風のさこゑを　さめくとも　こやの池の
いひそて　やそ風にあれ　なをむしく　思ふあまらふ
かさつむり　ゆきまかりつ　のたまのた　あり海そて
こんきての　そよ人とそを　ちうくすと　りれ奇そと
ゆく孫くはむ
春日社にまうてゝまりける百首の歌の中に
参議雅経
おほかたし　ゆりさけかさく　春の日に　光あまねく
てらす世は　なとかなくき　うき雲の　あらふとかゝと
ゆきらひて　面なけり方と　うそすきて　みそらあまれ

よろつよをいのるこゝろはちきりおきつあま上さかれ
堀川のしつむりとなりそあへしおもひて
ふちなみはゆるかぬ御代のしるしにてまつる思まて
よろつよもゆるかぬ君の一しほそ松よりまさる
かはらぬなからみやゐ出のなかにおもひ月をしのふを
かきつくあきとみえつきとせそおゆるとそふ
玉かつらうちとけかたいそのゝ花ふりはてかふ
ことくとも君をつうてむしへよへつなめしき
さかつきさみよ代下さしらまは志けとも中なれ
露もりなのこやみとかしこみゝあむくら花の

ゆふしてもなひくやいせの風ゆくとなきと
しもの葉にかさあつめけりかけ万代やそのすゑみ
めくみをそふ

又哥

あはれとも人もしるなる人しきさえのちは花をまふく

旋頭哥

堀川院の御時よてまつりける百首哥中

よ

俊頼朝臣

たちかへるはるさきまつりかはことさらにちくまて
そのかみけなき世にもいつの郎

題しらす　前大僧正慈鎮

いまへのみ山のてらにむかひてこけむとちらへゆよ
そむしふかつこころちのこすか

折句

いろやなきさとくのこしにかきつくまめとへの
ゆふけまつハ　新陽明門院兵衛佐

今は身の秋のささ山風よなかふそふハ雲のさえみれ
ささをたにしらぬりまろふしとを向ふにこそを
まなこさて　前大僧正慈鎮

さくらしみくしも見んかくも山をり桜をはなすされ

物名

はなかさとよめる　景能

山ふきのやへのさくらふきのつゆをさかなんはなとひとこひけれ
かつらや

はなのちるかかやまにも人のこゝろとしらまほしきも　壬生忠岑

人のやとにあはとほとふかたつゆのちりきを

つまこそ花こそききかせてつらすとて　恵慶法師

わかまつのはらは花つぬいとりかをしのゆかりとみ
ふへし　[illegible]

わさとそへけるにつめ侍りける木にひまつけて書つらね
前大納言為家にて侍りけるそへてつかはしける
しくと
津守国助
りか草のにしくわきれとをてはさやくたのむなる
かくて見れは身のうへ侍りけるとまれむすさえぬけ
さと
入道二品親王覚性
いにしへはゆかしき事もつゝるのけさしとはあちさく
後醍醐院の御時うへのをのこともあまた
しらぬとかくて見てこゝろうまつりけ
時よめる
後光明照院前関白左大臣
信ある家にとりおはしやうしかたゝぬむしもあらせん
しられらし
隆信朝臣
つまこふる鹿はしかなきはゝをそしらぬしらすとさきの
誹諧歌
亭子院にて梅の花をよみ侍りける
大中臣頼基朝臣
ちるまてはさゝはにあらん春雨よ我とおらすな梅花笠
ものへまかりけるみちにて梅花のさかりけるを
とおりてよめる
良暹法師
梅かえに昔の衣の袖ふれて花のかをさへおかし秋

落葉の中に　　正三位知家

あらはなる家の客まちてはもの乃ことさへかはらさつ
雨のふりしく時雨はよ滝のいきたる小川のと
いふ木のてとまらいなましく同じ乃行くに
まつしさりの例なしねしと待とてたのまり
をれはよめる　　西行法師

山さとの風のみかさにつもりてこ庵りのの軒にゆふ檜か
題しらす　　津守国冬

なかなかにのこの[illegible]まくみえやうの風かとは
百首の歌たてまつりし時　安嘉

入道前太政大臣

年ふれはなからへとこそひとゆかりにきそねきさらきて千年を
題しらす　　信實朝臣

山里にくらりそあれてきさらへふちすゝへの露秋
九月盡の心を　　基俊

露ふかき花の袂とも思へく[illegible]妹とゝめつゝ
亭子院の御時御前にめしてまかりて菊の葉
よかんのむしれかまとらるを思ひてたれかう
まつまさとおもせしとかりけれはよめる
　　頼基朝臣

りみち葉の枝よりかゝるの出る河ゐふちとしも惜しと思ふ
ぬれしとおもひてあはれにやとふ人もなきまゝにかりふ
つかりけり　よみ人しらず
いかにせんちりみちらなかの葉のはをみちなかにて
題しらず　小侍従
あひにくのしにかなしのそとやかならしのはかなき
六帖題そてしみ　後徳大寺中に
前大納言為家
秋ふくおるかはひとけりとおもひしも
後法性寺入道前関白太政大臣右大臣の時

川河の百首よみ述懐のこゝろを
源仲綱
ちきらくもくるまのせのかりあつめてこれかれと
車を
俊頼卿下
なけきつむちからの車のまとふかなきのあつめしを人さへそまで
康資王母よりこしてひかしくまして
これもけもしひつらしきの
伊勢大輔
たちよりのたやとふをそこにかふ人の身のこと世に我そ
返し
康資王母

今のおやになりてそ我おやのおもひはことわりしらるる

題しらす　賀茂遠久

やはらくる光をちりにましはりし御代のさかえをあふくすゑの神の宮と
うゐの玉(ひ)へてらすゆりまさし待もるに

忠峯

君かためあかぬ命のいたつらにそわれはゆくつれなきかりに
千世はふるらむや

新千載和歌集巻第十九

哀傷歌

題しらす　前中納言定家

きえやすき露のなかはの消かへりなきあき世とも物歎かな

自覚浮雲無所著といふことを

大江千里

我身からうき雲とのみなせはこそ行ともなくてみえわたるらめ

朱雀院かくれ給ての比ひえの山にて
まてよめる

中納言朝忠

そむきつる人の別はなかるる水そしるへなりける

右近大将道綱ふみならひしはべりける法師
よせうそこつかはしけるにかはりてよめる

右大将道綱母

こゝを川おさへの程をしるしとしてひ我やまのみちをたのしきん
遊し

よみ人しらず

見ん法を川我よりさきにふかくみさをにふかきふかき家かん
法性寺太政大臣家宝月ゆゑりよけるにや
をくりける

清輔朝臣

いとせ川くまぬの紡ぎゐさせてわかるゝにも袖そぬれまける
おし

後法性寺左大臣

きわむる袖ふかめて中川の水のなかれとこそしらなん
光俊朝臣

これ人の心ふかくなる川せにみせふかくるとしみなさき
おつまよりの所せける時不破宮ふかく恵孫
上人入滅のるすとよて侍そしひつかはす

惟賢上人

ひろしやなにそはなそて法わかゆく人よしあぬふみ寄
わかれ月のゆりよける一回よおとらふ
らふとそく人とこそよみ侍りける

恵鎮上人

かりてとゞめ給へさきなかりしかはなきことのはやとおもひて

民部卿為家一周忌に人々すゝめて一品経供養し侍けるに懐旧の心をよみ侍ける

権中納言為明

今はとていさめをきしにことのはの跡もかなしきぬれし袖

東二条院かくれさせ給けるに素服給はりて

ことゝおもひて

式部卿久明親王

しらさりき本よりなみたとふかくして潤てそ染る袖の色とそなる

おやのおもひに侍る時人ありやとゝひけり

藤原仲文

こゝろとはきくらん袖を夜ふかきて露とふ人のなさけ

東三条院かくれさせ給て又のとしのはるせし

そこしれる人のもとへ

紫式部

なかるらんの程ふさ袖をぬらすらん霧に寂ふへてきるらん

女御うせ給ひてのち

小野宮右大臣

見るまゝにいまはそめて桜花そてよりわかれの露やおくらん

弘安元年三月藤原景綱ともなひてふし

山のよしみをとふ寺にまうでて

祐文

蓮生法師同じ花のちり侍るをみて
人々三首歌よみ侍りけり
前大納言為氏
尋ねきて昔をとへハ山里ハ花の雪にもあとハ有けり
白河院御子孫家くれし侍を語りて侍りける
これまてと侍りけるにかはるての日人々ちり
きけハ世ふるの中にかくてなかれけり
大僧正道玄
さひしさや昔の家の人なくして花よりさきにちりぬる物を
為道朝臣下向侍りてその日結縁経供養
しける時寄菖蒲懐旧といふことを
了然上人
三重にふさそふ杖のあやめ草ふまてなかれぬとしもへにけり
又結縁経のついてにおなしくよみてたてまつ
りける
後中院前内大臣
昔にも涙を袖にかけそへてけふのあやめのねにもつきせぬ
花山院内大臣宰相中将に侍りける時その母の
ふくにこもりゐて侍りけるに南殿の橘のさ
かりなりけるをおりてつかはすとて
後深草院弁内侍

おもふ人袖のしつくとなる萩のもの思ひを
返しまひゐたるやうにかさねてきこえ
枝につけてはべりける　花山院前内大臣
いはへに孤し身と思ひて我袖はもやつれん
人のおもひに侍りける比寛平九日にまかりける日三
条入道太政大臣のもとにまかりてむすびける橘
の枝に諷誦文のうへそへいはふ人の匂ひを
おもひ出しては玉のありかのしるべともなれと
申て侍りける返しに

権中納言雄

今そしる袖に匂ひのもえてもとほき袖にとまれる匂ひを
やまひにしつけける比郭公をきゝて

大宰権帥為経

年ことにさえ雲ゐに聞ゆるよさ月ならずなくなれ
思ひしらず

従二位為経

待てふるくとそ思ふにきこえ山ほとゝきすなのるなを
このあいまに郭公のきまゝにかゝりける
をこれはをのにおとさえ色乃紙をむすび
つきとりとりてみるはなくありかしおや
のてふくしその山ゝてかきりけるみち

室はいとかくしくなるさまとなり
善にちらしうなさそへしに
ありけるとなん

法印實性身まかりけるをきゝてよめる

よみ人しらす

いふてへやまぬ路をもへる方なき別なるらん

父身まかりてのち太政大臣從一位をおくられ
侍りし宣命位記なとを見てよめる

左近中將義詮

ゆくへさためしなけれは位山のかひとてもあらぬ袖かな

うへのはつまてうつり給ひて尚侍のよ
きこえけり

九條右大臣

昔つもきゝしはやとにむしらは出てかはし房そなき

此覚法師身まかりぬときゝて

女御徽子女王

かれ世とそおもひしひとをなき人はおもふるへそえさ

從二位家隆身まかりけるを三年まて常に
人をよめる

前大納言為家

さためなき人の世をしのふかな風の音にも袖はぬれけり

いとけなき子よりふかくまてなきさくらは

世中を何にたとへんといふふることを
上におきてあまたよみける中に

源順

世中を何にたとへんあかねさす朝日まつまの萩の上の露

なくそちれよろひのをおもひて建長の比

長子薨康朝臣によなく侍し比よみ給ふ

源有長朝臣

なかむへき心は露とはさそ我身そなきさき

恒徳公の心よ給けるに長月文安信りと

やつかしける

選子内親王

色かはる秋の露のいかならんと思ひやるにもあはれさそ

きんぶれ思ひよ給ける時人のもとにつかはし

ける

近衛関白左大臣

ちるかてわかし秋の夕露は思ひそも消ぬへきされ

文永十年の冬後嵯峨院の御前備にて給

ひとつに寛元二年の秋亀山院にてとしさせ

給ふところによみ侍ける

前大僧正禅助

思ひやるみよのさかれき家をしの秋の雅れ露まも

月前懐旧といふことを

源経行

思ひあへす昔の秋のめくりきてなきさけらる袖の月かな

建治三年八月園空上人の源家屋室にて

おなしこゝろを　大納言為氏

めくりあふ影は昔にかはらねと見しよの月は袖ぬらすらん

後天門院かくれさせ給て小の陣よりいてゝ

素服たてまつりける秋月いとあはれに侍りしに

こその殊院号ありふせ給ける事なと思ひ

出てよめる　後醍醐院女蔵人万代

思ひきやなれて見しよの秋の月とし涙にくもるへしとは

一条院かくれさせ給ひてのち上人は念仏に

まいりて月いとおもしろかりけるに

ていて侍るとて　法成寺入道前摂政太政大臣

君まさぬ宿には月そ独すむふるき宮人たちもとまらて

返し　権大納言行成

いにし年こよひの月をみし時はいとゝ袖をもひやせし

二條院かくれさせ給ひてのち月のあかゝ

りけるを見てよめる

皇太后宮大夫俊成

雲の上はかはりにけりときくものを見しよにゝたる夜半の月かな

七月十五日秋月おもしろかりけるに舟岡にまかりて

西行法師

いかてわれこよひの月を身にそへてしての山路の人をてらさん

元亨四年八月十五夜の月をときゝこえりて

雨ふり侍りけれはおもしろに法眼行済かもとより

民部卿為藤のもとへ申侍りけるついてにくり

雨となる涙に月もかくれてやこよひのやみこそ見え

またしまし御中にて侍りける返りに

前大納言為世

よそまても雨そゝくらん遠山の月もこよひのかくやなからん

後宇多院くれさせ給ひて八月十五夜の

月くもりて侍りけるに宰相典侍よつかはし

ける

萬秋門院

おふさみし月もくもるゝ旅寝にはいとゝ涙とくもりけるかな

御返し

宰相典侍

光なき世にくもりの秋の月涙そへてやなほくもるらん

おなし比前大納言為世もとにつかはしける

権僧正道我

みちてる日もくもりてそ行山かけにふかきのかゝみやなやかちてくと

返し

前大納言為世

ゆふ山てる日に影のくまよりあかしくれやまくはまきひさ

亀山院の御忌にこもり給ひしときて
よつりしきつ　　　　法印定為

うかりける此世さかの秋に露しける時雨も月もやぬらん

返し　　　　民部卿為藤

思ひやれ露も時雨もふりまさる此世はさかの秋の悲さ

徳治二年の秋遊義門院かくれさせ
給ひて西郊の紀洞よりいてけるとき
浅茂野にて出ぬる思をとらせてよみ給ける

前大僧正忠源

玉しきの露さへかはらぬひとつ世にこそ出と思ふ
おやの思ひに侍りける頃六波羅蜜寺にて三十
六首哥よみ侍ける中に

源兼氏朝臣

草のはに苔の下にもをく露は我さへねや露こぼるらん

延慶三年八月廿日前中納言定家遠忌
に廿五三昧をこなひ侍りけるついでによめる

法印定為

たれもみな草のはにもてしみぬる露はそのよにさそふの
弘徽殿女御かくれ給ひける秋かの御ことさき

みせ給ひて　　　花山院御製

なくよ人の物ともへや雨のふるこれ袖よ露けき

安元二年三月後白河院五十賀ありて秋

建春門院かくれ給ひにけるまたの

上西門院兵衛

袖ふりし春の庭ともみえぬかなかはらぬさまに蝶林にて

鳥羽院かくれさせ給ひてのち人のもとへ給

けるに

西行法師

なくりとをさてゝ行し聖への鈴露を袖にうつして涙なり

従一位邦子月はかりに冬何なくりにまかりし

て侍けるとてよひつきける

前大僧正覚忠

なき人のとも昔かたりもとかたりに我や露けき

一条院かくれ給ひけるをおほえけるとて前

よむたまあめてまつりきこえけるにかなしきよ

つりてこそりくまゝ

堀河右大臣

いつかまた君をもみてはなりけんすべてもとられたなかなか

二月十五日母のみなくなりにければ

よみ人しらず

今は又我もなくねとそふかほとゝきすやよひ鳴なそう
近衛関白かれ侍ける時まゐりてよみける
かく月のかけふみて侍れはよみく侍るは
しきつ　藤原長経
忘るゝ又家中ゐかへりなしはなしかはのそこ人
人またくはまて又乃としよのこと侍ける
高階宗成朝臣
うきよそかくもりなき面影のさらぬかはまて
法師覚観上人身罷りける時よめる
良宣上人
あはれなるひはそてとかへかほまた我涙かな
藻壁門院くれさせ給て民部卿典侍世
そのまゝ仕けるを思ひ侍て前中納言定家
のりにのをそりける
従二位家隆
花のいろも経世よふる墨染の袖や涙にぬるゝなき
入道内大臣のそことけて悦ひさりなき
よしきこえけるにしも陽禄門院く
ま侍りよ人れはよろこひなき三つなれ
花のちるもおもひやりてたてまつり侍ける

入道親王覚誉

嬉しさを何むすほれし袖の上に散く涙の色ならずとも

返し　入道内大臣

うれしさをつゝむも袖を涙にて散きそ老の身におほえける

敬運僧都身ゆかりにならはしよみ侍りける

法印栄運

ゆくさきの命なれなへてなそや八十におほえける

大炊御門前内大臣身まかりける時よめる

大炊御門前内大臣母

とひさやむそちあまりのこえて子の別路にあふよしとは

権大納言行成のむすめにすみわたりけるか身まかりにけれは康資王母のもとより

ちきりさきの世よりいかさまに露と袖に

かゝらんとや申をくりて侍けるかへり

権大納言長家

住なれし人をなき床にかくしく袖は露もかはらし

神乃住よ侍ける時めくなりてのちさへや

ふりくりのかたとてもなし

大納言振人

ゆるへき時にもあらぬ都まても多かりしとを枕まくとせん

母の身まかりて侍ける又乃とし師走のはての日
らひて侍けるによめる

真昭法師

冬ふかみそれとのはらひより袖乃時雨にしもまたに
ちりのこるひとのおもかけ侍けるにおりみちれ

前右兵衛督為成

なき人を見て
ゆふ涙の袖のうへにまよひおかるゝ墨染のみちとも

文和二年十一月十一日花園院乃七年乃仏
事御経供養などありてのち山中よ
里勅書乃次に　　法皇御製

とひやまとおもふ霧のはれまよりそふ苔のたもとを

返し　　入道親王覚誉

ほとゝきす袖の涙はそのまゝにたゝや七年の霧そへさらめ

ふのひてかよひけるゆへに月まかりて写九
日乃わさし侍けるに花そのみかくらにと法
くりそこの○を入く補経よせし給ふに

兵部卿元良親王

君とまたて小刀をやまとそかはりぬかなはぬこと
御堂居文のちりのよさかりめぐら
てよませ給けるに　後光厳院御製

行かくて雲となりぬる君なれともむかしは後のかたみならまし

まうで侍りけるにせうそこもなくてかたゝかへ
てのち清性寺入道前摂政のもとへつかは
して侍りけれはよみてつかはしける

右近大将道綱母

深草の聖人の煙となりしをいつまての雲とみえてや
思ひしらする

大江嘉言

なき人のあとにたつみの煙とはなりしか夕暮の雲

無常の心をよみ侍りける

紀淑望朝臣（文イ）

なき人の煙のゆくゑと思ひて雲とみるさへ哀なりけん

無常念々の心を

達智門院兵衛督

とりへ山まなくよえせぬ浮雲やなくなくさるへきかなしからん

後深草院かくれさせ給ひけるに深草へおさめ奉

りけるよさりふけてくもりそめて侍りけれと

伏見院御製

消えし煙のあと思ふ西の空に立そふ雲かあかくいろのやま

遊子内親王かくれてまつせ給ひにとて出

しを行けれ時

後深草院大夫尚侍

おほよそのかぎりあるひのかりにこそはかなき露の袖へさ
いさしらむとつゝせ給ひてはなし

天暦御製

君のみや露をかゝへきこそはかなく逢とふ我袖をみよ
母の月あまりにける中陰のあひだ霊をよ
たりひはゝきを侍るに

覚性法親王

ほさあへいふかなかなりしそら露をたのむるさむは
おもひわするはなかなりけるはりけり

源時女

さればこそまことのほかの契りしもなきさかな
悲しからず

よき人ふかく

ほとゝぎすいふをもとめてきかせまほしき月ともろともに
西花門院にくれさせ給けるに待けり

権僧正深守

しゝふへきかたちもなかれとゆめぬなとそ人のみちならん
後一音院入道関白にくれ侍けるときにかゝりけるた
ろしてよめる

勝覚法師

なき人のゆくゑやさてもしらるかゆめとのみこそ思ひしかば
法仁法親王にくれ侍けるによみ侍ける

法橋行経

立そひてことしはさらに行末をかゝる松かけ月をみるかな

三縁院入道前関白太政大臣身まかりける時
知識にて侍りけることを思ひてよめる

雙救上人

志るへせし昔をもなをたのむへき世をはなれても我そのこれる
如形法師身まかりて人々に一品経すゝめ
侍りけるとき

祝部成茂

名をとめてたちぬる道のゆくへにはなきたましひもさそはれぬらん

祝部国長身まかりて後のあとをとひやつるとて
しけれは

祝部行氏

なき数のやまにつく日数へて又こそ苔やむすひゆくらん

返し

祝部忠長

しへても苔をもさらにみえわかて[illegible]のやまに残るつゝと

前中納言基成身まかりにけるまたの年よみ侍りける

権中納言基隆

苔の下に又見しかとも[illegible]袖の衣あやなき身とそなる

昭訓門院小督か母身まかりにけれはとふらひけるに
くるゝ生る又苔の下に志ひとや侍る　法眼源承

わかれてもしほしく侍るかな

法眼珍海

歌よみはひとりもあるひまもなしいつかはそなたに西方を念せよ

返し　　法眼源承

まことよかつふかき秋をおしむかな雅のひまなき心

前大僧正慈鎮身まかりて後一月日

よみおくりける時よみて給ける

入道親王尊覚

いとゞまた月日の暮をそへつゝ又春月をめくりきぬらん

慈好法師か母身まかりにける一めくりの法

事の日いけりけるによみてつかはしける

前大納言為定

別れし秋は雑のめくりきて時もおなしことしのそ恋しき

返し　　慈好法師

めくりあふ雑にいとゞ遠く成なれもみるにはなをぞかなしき

法眼珍海おもひ出ありて給はりける女身まかりにけるに

まけつかはしける

前大納言為氏

とをは行月日にそへていつかはなさき西方のこゝろなるらん

返し　　法眼珍海

なきさへの月日そいとゞかけるてなる西はけふ身に遠き

前中納言定家十三年の法事に一品経
すゝめ侍けるに次に秋懐旧といふ事を
よみ侍りける
常盤井入道太政大臣
のちの世の時さへ秋の夕暮といふにとゝめしことそかなしき
悲しらす　平宣時朝臣
思おきて世のすてかたくとも見ん人の数よりす
平行氏
思ひ出つることをわすれぬ秋さへに人の別なり
藤原秀茂母の思ひに侍ける比申つかは
しける
西音法師
露とのみきえにし形見と思ひかさね昔おほえて袖やぬるらん
返し　藤原秀茂
今とても昔にかはる事もやはあるふるさとの涙なりけん
法仁法親王かくれ侍てのちかさねてつかはし侍
りけるおほえぬことと思しきみんによみ侍ける
入道二品法親王法守
我身世になからん後のことをこそ思ひもおきしをやすさ
家はなれ母とものひてかなしひぬてなひ
よみ侍りてやむとしける侍りことひしう

とゝめけれはいかになきさらしとのこ
ころへけるにみの女経かく月あかりけれは
よめる　藤原基政
あか世をもなしとこそ七佛のやそてあまりになりてそ隠さ
そうなさこしとなへしおもひこそあはれけれこの月
のいりしをかなしむなりけりきく
清原長算
見し人のなかれし同じかそふとも何ほとけと誰かしらん
母の月かりてのち六道のちよりて四向
し侍けるに生死もいつれおほかりて

よめる　行蓮法師
あはれにも何ぬ深きいつまてか又うけへて月とそくらん
ころふしをりになりにけるあかつきに
よみてつかはす　為道卿下女
かくはかり世をそむくひのつきせすはうきをしる月かみや　こゝろもん
返し　大納言顕實母
うきをさへ世をそむくひとこそりてうけゝるさき月を
又なきしかめて

新千載和歌集巻第二十

慶賀哥

天禄四年五月廿一日圓融院一品宮にわたら
せ給ひてらんごうたせ給ひけるに
そのまけわざを十日の宮よりたてまつら
しめ給ひけるによめる

よみ人しらす

あまつれもまとみかはゐさくなれる千代の数とぞおもふ

題しらす　　貫之

ちとせふと我さくたへよかみのまつさきためしになれるけさ

正治二年百首哥たてまつりける時

後京極摂政前太政大臣

むしろ田のいつぬき河のさゞ波にむれゐる鶴の万代の声

小野皇太后宮むまれ給ひける七夜に衣
こにそへてつかはしける

枇杷皇太后宮

まふ鶴のたちゐる衣のふりは千世の始にあまるやさしき
むまるみのこやふちこれきみやかしとて

權大納言長家

としなみは辺鶴の毛衣猶りのく又この千代とこそ数しき

堀河院位につかせ給ひける時修理大夫家
保はしめて殿上人になりて拝舞しける
ける日いはひそへつかはすとて

周防内侍

千とせふる雲ゐにさそる鶴の子のすゑはるかにも思ほゆれ

返し

修理大夫顕季

千世ふへき雲井をたてゝたちける鶴の子もおもひみえて嬉しき

建武二年内裏にて人々に題をさくりて千
首歌よませられける時鶴を

道熙法親王

君か代はちとせの数とよろつ代も雲ゐにあそふ鶴のゆくすゑ

宝治百首歌たてまつりける時鶴

前大納言為氏

あまたとしいはふ鶴の夕こゑにちとせをさしてそなくなる

平重時朝臣子うませて侍りける七夜によせ
てよみ侍りける

前大僧正隆弁

ちとせまて行末とをき鶴の子をそたてゝも猶君そみるへき

返し

平重時朝臣

千年ともかきらぬ松と鶴の子のゆくすゑの子の数としらはや

建武二年正月十二日内裏にて竹有佳色と

よろしくと讃せられけり

等持院贈左大臣

百敷や生そふ竹の数しらぬ千代のためしそみえける

武家にて名ある親王家の竹不改色といふ
ことをよみ侍けり　平貞時朝臣

萬代もかはらし君とあふきをいたゝきそめのこ丹弁

文保百首うたてまつりける時

前中納言實任

君かため千世ふる竹とうゑおきし庭の呉竹

百首歌奉りし時庭竹

按察使實継

この丁二ふよさをて竹のおなしけれにあつらへさ

千五百番歌合に

大納言通具

わかみとりよの梢にもさしてゆかむ

圓融院乃内侍正月七日よみてまゐりけり

歌

東二条入道前摂政太政大臣

我よりも松の千世をしる人にもとめて

普光園入道関白左大臣家にて十首歌

よろしくとよみ侍けり

源兼氏朝臣

千代のこ子日に松に契りおきなからの色もかはらせて
おほ君に大かたこそまつるかの日もさ
ゆくへはるかにかさつけ給ける

藤原道信卿

君かもとねのひに子日をこそ重ねふく松のおもひかはりて
祝乃命とそしるら

源道済

千年ふることわれ松をひきつつ君か代は生ひのほるらん

建仁三年和歌所にて釈阿に九十賀たまはせけるときによませ給ひける

後鳥羽院御製

いくとせをちきりて忘れなく乃子にこえてとしのさかのり
正月七日大納言経信のもとにつかはしける

京極入道前関白太政大臣

おとなまちつつえを待ちて千年ふる君かねの日に松をひきつれ

寛治二年正月後湯殿院にて松久とふことを講せられけるに

堀河入道左大臣

よろつ代の松の千年にあり千年に春をとりきてぞ君そみる

康永三年後二月十二日仙洞にて松延年
友といふことを講せられける時
藤原為重朝臣
我君のめくみをそへて契りし松のよはひは我よなるらん
兵部卿隆朝
末とをき君かみかきを契りてそ木たかき松もいはひそめけん
ことゝ
建治四年正月東宮にて初会祝といふ
後西園寺入道太政大臣
雲ゐまてのほるへき道をたえしとや千とせをこめて契り置けん
うへの松のことゝも松を経亀といふことに

かしこまりし次よりまゐらせ給ひける
御製
色かへぬ松の千年をちきりてそ我代もともに万代の末
弘安八年三月従一位貞子九十賀の時
まゐらせけるにいまは我子のやとゝやきく時まゐらせ
給ひける
伏見院御製
かきりなき齢の程にいまそしる我たに松ちよをちきりて
正応二年内裏にて鶯是万春友といふ
ことを
前大納言為兼
鶯のなくねも君か代によろつ世かけてはるやかさねん

元弘三年立后屏風に花の木に鶯
なく所　　後宮女院宰相典侍
立そむる御代の春とや鶯もよろこひのねをけふはなくらん
建長元年祝部成茂七十賀に四季屏
風調してつかはしけるに粟津野の所に若
菜つむ所　　前大納言為家
いさきみは若菜つみそめて栗津野のあはつのゝへの小松をもひかん
寄日祝といふことを
　　後光院入道前関白太政大臣
春の日の光をそふる山の端晴てかはらぬ影は万代の春
嘉元三年二月十六日内裏にて梅花盛
久といふことを講ぜられけるに
　　金光院入道右大臣
梅の花色もにほひもさかりにて雲ゐの春そ風ものとけき
正中百首歌たてまつりける時
　　後光明照院前関白左大臣
心をそまつむけぬるは君か代にあへる我身はおもひかねとも
　　後照念院関白太政大臣
立かへりこゝのへ時の面影は知ともとも八代まてつかへてきみ（さりき）
長治二年閏二月中宮花合に

よみ人しらず

百敷に八千世まて桜花にほはん春そかきりしられ（ぬ）

此醍醐院にゝぬよれたし御しけつとされ

後普光院前関白太政大臣左大臣ときこえ

けるは天円の御くらゐゆつりて南殿にて

うらもてゝ植ける花の御そそ植たれはあり

女蔵人萬代

古き雲の桜しる又よきかつ此代の春やたちかへりなん

正徳二年三月為朝覲の行幸

ときき花漆ときこえしふしきと難せられ

為道卿

花の色はちとせをかけて古き雲に残る春にあらなむ

前参議為實

ふるさとの雲さへや九重の花の色にしふ九重の春をそへつゝ

花しらす

徳達云

君みよと行しら道いちりをせさそう一ひもときけるの

延安八年三月従一位貞子に九十がへたまはせけるときよみ侍る

前大納言為兼

九千代みちぬる春の時にあひて花の心をきくそうれしき

達智門院にさきたちまゐられし比なをさくら
につけてあまくまゐらせ給ひける
後醍醐院御製
まれにつゝもまちてぞ見る桜花ひとりさくらこそあれ
御返し
達智門院
いまそけふ心ひきて君か代に花もかひある身とそ知る
五月五日枇杷皇太后宮に菖蒲のねを
あてまゐらせ給ふとて
上東門院
底ふかくもとめてみえぬあやめ草千とせの松にひきそへてん
法成寺入道前摂政太政大臣のもとにくす
玉につかはしける
枇杷皇太后宮
なかき世のためしにひきをあやめ草おもふ心もかれしわかれさ
返し
法成寺入道摂政太政大臣
ありあひて見えぬあやめのねをそへてなかき世まてのためしにやせん
崇徳院位におはしましける時女中より菖蒲を
いふとくと奉せられたるにおほむ
法性寺入道前関白太政大臣
菖蒲ともかしこもあれぬるとも世のつきせぬためしなりけり

正安三年七月内裏にて七首の哥めし
けるに　　寄秋恋
行末は猶久しさもあまのはらちよ尽しめの糸よりかはりて
照しらす　　藤原為光
万代の松よりいつる秋の月久しきけしきとみえもなし
寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて翫池上月
とふるくとを　　富家入道前関白太政大臣
いくちよりすまむと思ふ池のおもにうつる月の影ものとけき
弘安三年八月十五夜内裏にて月五首
哥講せられけるに
前大納言為兼
めくりあはむ千年の秋の行末を月にそ契る雲の上人
前内大臣重菊亭より大臣の拝賀申
ける次に人々哥よみ侍るに秋祝といふ
ことをよめる　　権大納言公直母
影そひく光をそへて此宿の月に昔をとふ思ひそ見る
文治六年女御入内月次屏風に田中に人
家ある所　　皇太后宮大夫俊成
秋深き山田のかり子もかへてなさましく世にあふ道もひく
建保二年八月十六日内裏秋十五首哥合

秋祝　　　　　前中納言定家

山水に老せぬ千世をせきとめてなかれもたえぬ白菊の花

女院より菊をめされけるにそへてたてまつり
ける　　　　昭訓門院新大納言

いく千世と菊のさかりもみてさかむをきなもたのむ君かよはひに

元弘二年立后月次屏風に白菊のある所

弾正尹邦省親王

をさまれる御代のひつきのよそひかと大空人にうつる菊かな

入道親王覚誉入室のころ菊をきりて

こゝろみ侍ける時河千鳥を

二品法親王覚助

白川のなかれたえぬなかれにまとゐして万世契るなかにとよりわれ

建仁三年和歌所にて釈阿に九十賀給
はせける時の屏風に

前中納言定家

菊の山をちを見れは露に小年ふる秋の光をそ見る

昇殿ゆるされて侍りける時雲井の菊を
なとつかまつる折のよろこひにつかうまつり
ける

源兼胤朝臣

けさ又雲ゐのきくをみるたと分てふりにし代の露をたえしの

題しらす　　中原師光朝臣

なさけある代のことわさをよそへても昔のあとはたえし

前大僧正道勝

君か世は昔にかへる千とせの月とゝもにやそへてあり千とせにせん

嘉元百首歌たてまつりける時祝

前大納言為世

ときはなる千とせの坂の千年とも君そこえへてある数せん

宇治入道前関白太政大臣九十賀によみ侍りける

閑院贈太政大臣

くらふやま林のおかの万代の数をそむかへしめなん

弘安八年三月従一位貞子か九十賀たまはせける時よめる

前大納言為氏

老の坂あまたこえきてひとつをそへても猶千年は君のまに〳〵

嘉元百首歌奉りける中に河

亀山院御製

万代をはこふ坂のみちの末とをくそへて河の流にまかせよ

暦応三年六月廿七日松陰映池といふことを講せられける時つかうまつりける

按察使資明

松かえのみとりはふかき池水にうつるをハ君か千世そとみる

権中納言為明

松に咲花のいろもかはらて十かへりまてとすめる池水

康保三年内裏哥合に十月廿二日あそひ
らん所のこゝろみにつかはす二番乃方菊乃をれ
いとおほくなみよそれはあまたありてその
ことをえりて松につけたりける哥

よみ人しらす

ちとせふる松につきてやうへてみん世をかさねつゝ宿らん

京極前関白太政大臣家哥合に

藤原顕綱朝臣

君か代はたかゐの浦のさゝれ石の岩ねの山となるまて

建武二年内裏千首哥に雑地儀

権僧正良聖

うつしうゑし松の山たかき千年の坂も君そこゆへき

寛治百首哥に寄日祝

常盤井入道前太政大臣

千代やなほ数しられぬ山の朝日かけ君か世にこそあまたかゝやけ

後西園寺入道前太政大臣中宮にまいりて侍ける
琴と宣政門院いまた一品の宮と申ける時
あそはせ給ひつゝよし楽器の院へ申

後京極院

さき行とて

代々をへてさきみてし山の松の風千年のちぞゆかりなる

御返し　遊義門院

行末をゆかりとたのむ雲の風つたへんちよの松ぞたかき

千五百番哥合に　西園寺入道前太政大臣

君が代をとふ人ぞなき出る日の光をはなちてまほらなん

伏見院位におはしましける時夜は御はしまきの枝を給はしてよめる

常光院入道前関白太政大臣

君が為かゝるやまとのことの葉をと身をも思ふ時かな

嘉元百首哥たてまつりける時関

道ありて君が七代にあふ坂のせきのまさしき道ぞしらるゝ

前大納言為世

よろこびも昔のほかぬ御代にあひしく我ぞ来とおもふ

元徳元年後七月九日蔵人にて神泉苑のあまごひの勅使にむかひて侍ける小雨くだりてまいりて侍る時朝餉にめされて御衣をかづけられけるは勝津に

いそ拝し侍る時思ひつゞけ侍る

藤原朝定卿

幾乃度めくりにけりな唐衣あらたなる御代をたちかさねつゝ

正治二年百首乃中に祝

隆信朝臣

万代をつくせる君をさゝ我君とそらにたのむ千とせの老

祝部成茂七十賀し侍りけるに聞えけれは

おもひやるへや千とせをつみて世をかさねけり

後嵯峨院御製

七十乃春めくりや昔より庭乃松枝を定めおきけん

貞和百首乃中に

花園院御製

葦原や乱れぬ国乃風として やまとのことの葉もいや栄ゆく代そ

入道二品親王尊道

よろつ世をかけて渡るしるしとや波もしつかに世をおさまれる

題しらす

津守国冬

和かの浦や波よりたちし和かの道も代をかさねつゝ

慶雲朝棟

秋津洲の国津神まもる代なれはことにたに君か御代そひさしき

貞観政要乃文を聞侍りてよみ侍る

治国の栽樹とのへつゝを

卜部兼直

うこきなき山としまもるかきはには本も玉をもときはさむ神やしろ

正安四年六月後宇多院賀茂社に御幸
侍りける時さふらひぬる人々に題をたまひて奉つ
かうまつりけるに社頭祝といふことをよめる
まつり侍りし

賀茂経久

神山の峯に生ふる玉椿八千代は君がためとかみなん

村上院御時天慶九年大嘗会主基方
参入音声備中國高倉山をよめる

よみ人しらず

雲乃上に萬代のさかゆくは高倉山そ君にそあふ

天仁元年大嘗会悠紀方近江國石根山

前中納言匡房

いはね山やまあひにすれる衣袖ゆたかにも見えて嬉しき

文應元年大嘗会主基方神楽歌

従二位行家

いくとせもくもらぬ山のやまかつらかけてやひさにつかへまつらん

文保二年大嘗会悠紀方巳日乃参入
音声近江國新居郷

前大納言俊光

いましへにやあらまほしみさくられまゐ井の
星はふきりひまり